令和元年度老人保健健康増進等事業

認知症の本人の意見と能力を活かした生活継続のための認知症施策の総合的な展開に関する調査研究事業

認知症の本人のチカラを活かした

地域アクション取り組み報告会

令和2年2月22日

日本認知症本人ワーキンググループ

令和元年度老人保健健康増進等事業
認知症の本人の意見と能力を活かした生活継続のための認知諸施策の総合的な展開に関する調査研究事業

事業報告会　プログラム

〇日　時：令和２年２月22日（土）　10:00～16:30
〇場　所：品川フロントビル（東京都港区港南2-3-13）

予定時間	内　容	頁
10:00～10:10	開会 ごあいさつ ■検討委員長：粟田主一（東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と精神保健研究チーム研究部長）	
10:10～10:30	認知症の本人のチカラを活かした地域アクション 取り組みのねらいと経過、見えてきたこと ■検討委員：藤田 和子（日本認知症本人ワーキンググループ） 永田 久美子（認知症介護研究・研修東京センター）	1
10:30～12:00	試行地域からの報告（１） ■コーディネーター：永田 久美子（検討委員） ①静岡県健康福祉部長寿政策課 ②藤枝市健康福祉部地域包括ケア推進課 ③加東健康福祉事務所（兵庫県北播磨県民局） ④三木市健康福祉部介護保険課　三木市中央地域包括支援センター） ⑤さわらびの郷／小野市地域包括支援センター	 12 21 35 41 51
12:00～13:00	昼　休　憩	
13:00～14:35	試行地域からの報告（つづき） ⑥香川県三豊市立西香川病院 ⑦大崎市高齢介護課／志田地域包括支援センター ⑧郡山市地域包括ケア推進課	 66 81 101
14:35～14:50	休　憩	
14:50～15:50	⑨鳥取市長寿社会課 ⑩大牟田市	112 122
15:50～16:20	本人の意見と能力を施策に生かすためのポイント	
16:20～16:30	まとめ・閉会	

認知症の本人のチカラを活かした地域アクション

取り組みのねらいと経過、見えてきたこと

藤田　和子　検討委員
日本認知症本人ワーキンググループ＊
代表理事

永田　久美子　検討委員
認知症介護研究・研修東京センター
研究部長

＊一般社団法人　日本認知症本人ワーキンググループ（JDWG）
認知症とともに暮らしている本人が主になって結成された全国組織。
希望と尊厳をもって暮らしていける地域社会を創っていくことをめざして活動を続けている。

お伝えしたいこと

1. 取り組みの背景とねらい
2. 取り組みの経過
3. 取り組んでみたことで、見えてきたこと

Ⅰ.取り組みの背景とねらい

【背　景】

1. 本人が、暮らしやすいわがまちを一緒に作る時代に

＊認知症とともに生きる私たち本人は、今とこれからの人生を、希望と尊厳をもって暮らし続けていきたい、暮らしやすいわがまちを、私たちの体験や工夫を活かして、一緒につくっていきたいと 願っています。

＊その願いを込めて、全国各地の本人が声を寄せ合い、「認知症とともに生きる希望宣言」を発表しました（2018年11月）。

認知症とともに生きる希望宣言

1

自分自身がとらわれている常識の殻を破り、
前を向いて生きていきます。

2

自分の力を活かして、大切にしたい暮らしを続け、
社会の一員として、楽しみながらチャレンジしていきます。

3

私たち本人同士が、出会い、つながり、
生きる力をわき立たせ、元気に暮らしていきます。

4

自分の思いや希望を伝えながら、味方になってくれる人たちを、
身近なまちで見つけ、一緒に歩んでいきます。

5

認知症とともに生きている体験や工夫を活かし、
暮らしやすいわがまちを一緒につくっていきます。

＊今、認知症とともに生きる希望を語り、暮らしやすいわがまちをつくるための活動に参画する本人が、全国各地で増えてきています。

【背　景】

2．社会全体で、希望と尊厳をもって暮らせる社会を目指す時代に

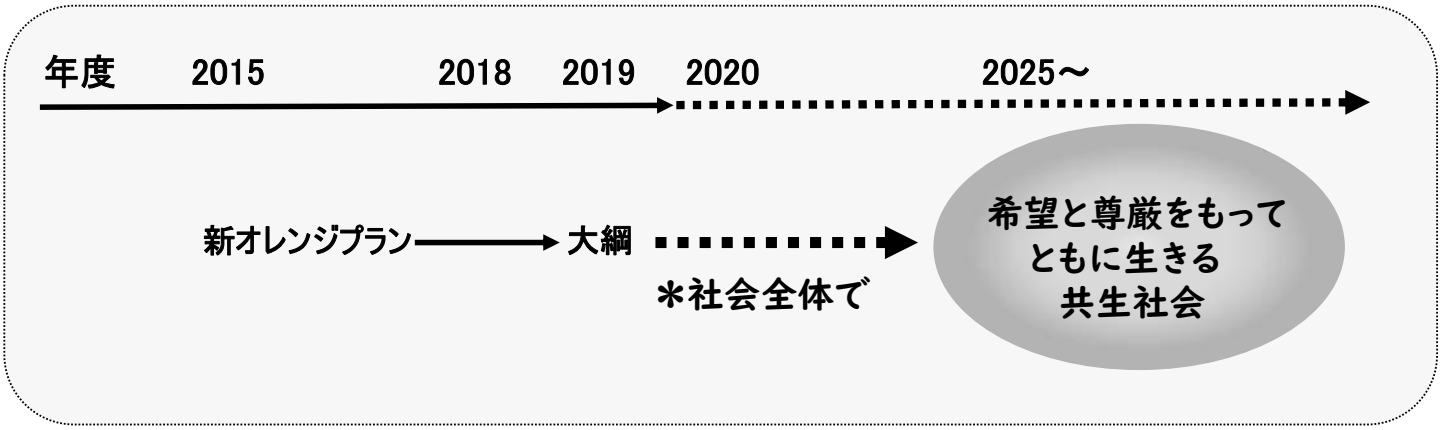
＊新オレンジプランの後継の認知症施策推進大綱では、

「希望と尊厳をもって、認知症とともに生きる」

「認知症があってもなくても同じ社会をともにに生きる」

共生社会を、社会全体で推進することが目指されています。

（2025年まで）



【背　景】

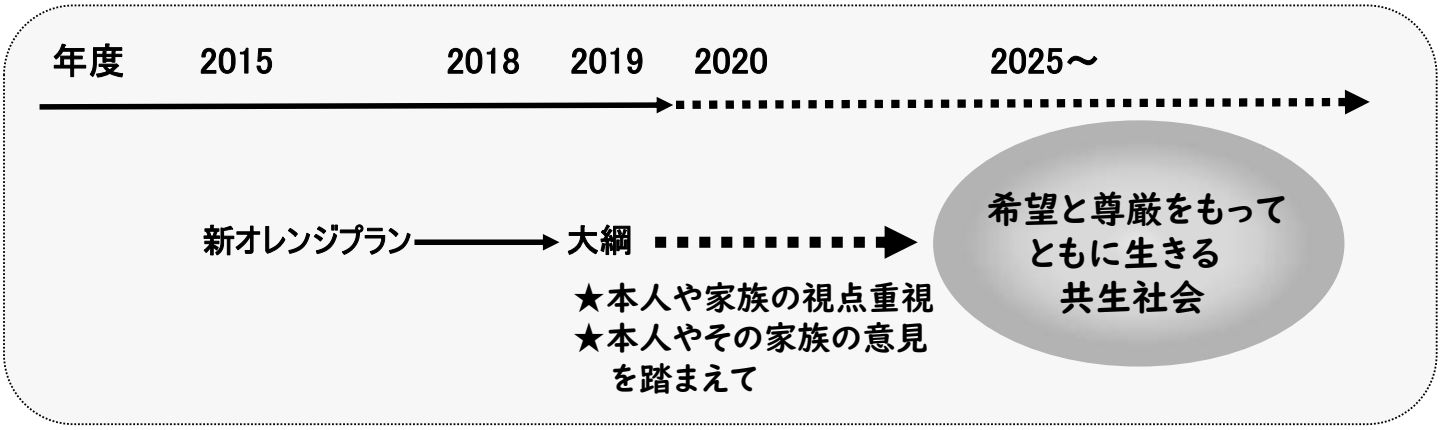
3．施策は、本人の視点・意見を踏まえて、立案・推進する時代に

＊大綱では、すべての施策は、

「本人や家族の視点を重視」

「本人や家族の意見を踏まえて」

立案・推進する方針が掲げられています。



【背　景】

4. 現状では、自治体の大半が、施策の立案・推進に、本人の意見をまだ活かせていない

＊2018年度実施した全国自治体を対象とした調査結果より

	都道府県（N=47）	市区町村（N=1,025）
●計画作り：委員会等に本人が入り、意見を聴いている	12.8 %（6）	0.7 %（7）
●評価：評価の段階で本人の意見を聴いている	6.4 %（3）	3.0 %（31）
●見直し：工夫や改善のため本人の意見を聴いている	63.8 %（30）	10.7 %（110）

平成30年度老健事業「認知症の意見に基づく認知症施策の改善に向けた方法論等に関する調査研究事業」（JDWG）全国調査結果から

本人の意見を活かせていない背景・理由（主なもの）
～市区町村の行政担当者の回答より（2018年度）～

行政担当者が本人に出会えていない

- ○意見を言える人がいない。
- ○話せる人の把握が難しい。
- ○本人に会っていない。
- ○本人とコンタクト不足

地　域　の　課　題

- ○周囲に知られたくない人が多く、本人が出てこない。
- ○周囲の偏見が強く、本人が声を出しにくい。
- ○話し合う場への参加を支援してくれる地域の資源が不足

行 政 組 織 の 課 題

- ○年々事業が増える一方で行政担当の人手、時間がない。
- ○提供者目線で事業がバラバラ進む
- ○本人の意見を聞く優先度低い行政の意識が希薄
- ○関係機関との合意形成が不足。

家　族　の　課　題

- ○話せそうな本人がいても、家族が、「本人は話せない」、「無理」と、家族に断られる。
- ○本人の話を聴こうと思うが、家族の困り事を聴くことが中心になってしまう。

行政担当者の多くは、多面的な課題の中で
本人の発信や意見を活かす方策がわからず苦慮している

【2019年度のねらいと取り組み】

ねらい

①どの自治体においても、本人が生活継続していくための施策を、本人の意見と力を活かして総合的・スムーズに進められるようになるための考え方、方法、具体例を提示する。

②全国の自治体で、施策や取り組みを、本人の意見と力を活かして進めることが、「あたりまえになること」を加速。

試 行　　集 約

取り組み：試行プロジェクト（全国の試行地域で）

各地域の地域特性、すでにある事業を活かしながら、「本人の意見を活かす」、「本人参画」、「本人の視点にたつ」取り組みを、各地域ごとに立案し、取組んでみる。

試行地域一覧

地域、人口規模、実施主体の多様性を考慮して選定。
→他地域が取組んでいく上での選択肢の多様性を増やす。

人口・高齢化率は資料からの抽出、一部（※）は研究班調べ

地域	人口	高齢化率	試行のフォーメーション等
大崎市（宮城県）	130,158人	29.4%	市高齢介護課、地域包括支援センター、ケアマネジャー等
郡山市（福島県）	322,860人	25.8%	市地域包括ケア推進課、認知症地域支援推進員、介護支援専門員、小規模多機能型居宅介護職員、グループホーム職員等
静岡県・藤枝市	（藤枝市）144,900人	（藤枝市）29.5%	県長寿政策課、当事者（本人：県ピアサポーター）、ケアマネジャー、グループホーム等
兵庫県加東健康福祉事務所・三木市・小野市（兵庫県北播磨圏域）	（北播磨圏域）272,447人 （三木市※）78,100人 （小野市）48,486人	（北播磨圏域）29.7% （三木市※）32% （小野市）28%	三木市（地域包括支援センター）・小野市（地域包括支援センター）、他圏域市町内事業所、地域の本人、住民、団体等
三豊市立西香川病院（香川県認知症疾患医療センター）	（三豊市※）62,531人 （観音寺市※）62,780人	（三豊市※）34.3% （観音寺市※）30.1%	本人（西香川病院非常勤職員として）、管内市（三豊市地域包括支援センター・観音寺市地域包括支援センター）等
鳥取市（鳥取県）	187,112人	28.9%	地元の本人、家族会、認知症地域支援推進推進員、県若年性認知症サポートセンター等
大牟田市	114,496人	36.3%	市内当事者、介護事業所職員、地元事業者（ヤマト運輸）等

２．取り組みの経過

試行プロジェクト

①試行プロジェクト地域　全体ミーティング（2回：8月、1月））

試行プロジェクト地域の担当者が集まり、合同ミーティングを開催。
事業目的、進め方の共有、本人参画の成果等の相互活用を推進。

②全国8か所（市町村・地域）で試行プロジェクトを実施

すでにある事業を活かして、本人の意見を聴きながら、施策の拡充を図る取組を、認知症の本人が参画しながら実施。

各地域が取組をリポート
- 自地域なりの取組のプロセス
- 工夫したこと
- 取組んでみたことで起きたこと
- 変化や成果
- 課題
- 取組んでみて、気づいたこと
- 次に取組む人に伝えたいこと　等

③2か所で試行地域ワークショップ

試行地域が所在する県（静岡県・香川県）と協働した形で、
本人が参画した管内市町村向けのセミナーを実施。
管内全体へ本人発信・参画の考え方や取組の普及・推進を図る。

①試行プロジェクト地域　全体ミーティング（2回）

他の地域の考え方や取り組みを聞くと、刺激になるな～

自分の地域でできることは何かな。持ち帰って、もっと話し合おう

第1回（8月）
試行地域の担当者が集合
事業の目的、進め方を共有
試行が本格的にキックオフ

試　行　約5か月

こんな工夫をしてみました。やってみたら・・・

本人の発信と取り組みの実際を映像で伝えたい。

第2回（1月）
試行期間中に
それぞれの地域なりに取組んだプロセスや工夫、成果・課題等を伝え合う。

②全国8か所（市町村・地域）で試行プロジェクトを実施

試行　各地域に今ある事業・取組に、どのような工夫を組み込めば、本人の声を聴いて活かすための「仕組み（企画・実施・評価（改善）のステップ）」や「環境づくり」につながるか。

本人たちの声（思い・意見・力）

今ある事業等を活かす

試行：各地域で今ある事業に取組ながら、話しあいながら、創意工夫をしながら

ミーティング事項（1）
声・意見を聴くため工夫
（本人たちが声・意見を出すための工夫）

ミーティング事項（2）
本人の声の“見える化”
・情報化の方法
・共有の方法や範囲
・情報を活かす場・機会

ミーティング事項（3）
”本人の参加・参画”
（企画・計画・評価・改善への本人たちの関わり）

＊各地域ごとに、今取り組んでいる多数に事業等の中から本人の声を活かし、参画を図る事業等を焦点化。

＊焦点化した事業等を、本人と共に進めながら地域にある資源・他の事業とも連動を図る。

今ある事業等

①認知症カフェ／地域にあるサロン等
②本人による話しあいの場：本人ミーティング・本人による相談（ピアサポート）
③地域の集い（住民の集まり、家族の集まり等）
④医療機関（診断・治療等で受診した機会）
⑤地域密着型サービスの利用時（認知症デイ、グループホーム等）
⑥地域包括・市町村の相談窓口
⑦ケアマネジャ・包括等の在宅訪問時（ヒアリング・アンケート等）
⑧認知症ケアパスの見直し
⑨市の認知症施策検討の委員会
⑩啓発事業:講演会
⑪行方不明防止の模擬訓練
⑫防災についての話し合い、地域イベント
⑬市の認知症条例づくり
⑭その他

③試行地域ワークショップ

＊試行地域の2県で、本人が参画して開催
＊管内市町村全体に、本人発信・参画を普及・推進

【香川県】 10月8日

地元の本人が開会あいさつ。
取り組みを呼びかける。

本人が、発信と参画の体験、
必要なことをリアルに伝える

本人と共に取り組んで
きている人たちも語る。

【静岡県】 11月14日

地元の本人3人が、座談会形式で
体験と必要なことをを語り合う。

県内の活動報告

＜2地域共通＞
参加者；行政担当者、地域包括支援センター職員、認知症地域支援推進員、疾患医療センター、
初期集中支援チーム員、医師、地域活動の関係者　等
プログラム：本人、そして取り組みを共に進めている行政・関係者の話を聞いた後、地域ごとに
今後の　自地域での取組みについてグループワークをし、全体共有。

4.取り組んでみたことで、見えてきたこと

試行地域の取り組みを通じて、起きたこと・見えてきたこと

①「本人の意見を活かすこと」を地域共通の方針とし、意識を高めると、本人の意見を聞く場/機会は、既存の事業の中に多様多数、生まれる。

②「本人の声を聞く」ためには、本人が語れる（発信できる）ための関係づくり・環境を、継続的に育てていくことが重要。

③取り組みの企画当初から本人の声を聞き、意見を活かして取組みを進めると、
→事業等が、本人にあった具体的な内容になり、本人参画が自然体で進む・広がる。

→取り組み途上で（短期間であっても）、本人、家族、関係者、地域の人たちに様々なプラスの変化が生まれ、（小さな）成功体験、成果が積みあがっていく。

試行地域の取り組みを通じて、起きたこと・見えてきたこと

④取り組みが進展するためには、行政担当者と関係者の方向性・方針の共有・合意形成が大切。

＊取り組み当初に、方向性の共有

＊取り組み途中で、本人や本人とともに動いている人たちの気づきや 意見を活かして、取り組みを柔軟に展開（変更）することへの合意形成

⑤一つの事業を本人の声を活かしながら本人と共に進めると、地域にある資源との新たなつながりや、他事業との連鎖・連動が生まれる。

＊一つの事業でも、本人と丁寧に取り組み始めることで、各種事業が本人視点で総合化・統合化されていく。

試行地域の取り組みを通じて、起きたこと・見えてきたこと

⑥取り組みを効果的・持続発展的に進めるためには、
本人を起点にしてフットワークよく動けるためのフォーメーションづくりが重要。
*地域によって、フォーメーションのカタチは多様。
＊市町村内ごとにあったフォーメーションが形成されるいくためには、
県レベルのバックアップが必要。

試行地域の取り組みを通じて、起きたこと・見えてきたこと

⑦自地域にあるもの・資源を基盤にしつつ、近隣地域や管内、全国の
本人の意見を活かした取り組みの考え方や情報共有をはかると、
→取り組みがバージョンアップする。
→取り組みを加速していく、きっかけになる。

●試行地域　全体ミーティング後

・自地域で、今後強化が必要な点できそうなことに気づけた。

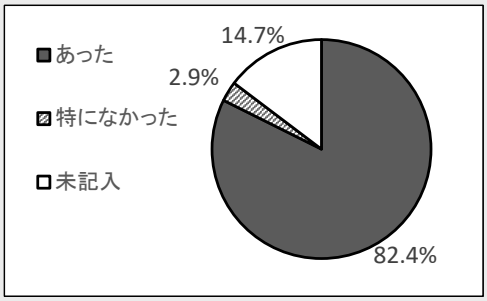
・気づいていなかった自地域の特徴やいい点、やれていることに気づくことができた。

・他地域の人と直接話し合うと、方策の細かい点、書面化にしにくい点、悩み等を具体的に話し合うことができ役立った。

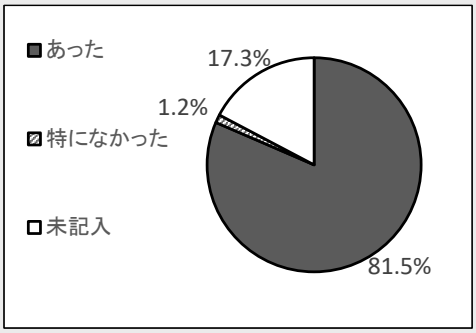
・前向きに取り組んでいる人に出会えて、刺激を受けた。

●試行地域ワークショップ後：活かしていきたい点

＜香川県＞
N=34



＜静岡県＞
N=81



今後の展開は・・・・全国どの自治体でも

従来

企画・立案 → 実 施 → 評 価 → 改 善 → 実質の成果？

本人不在、意見の反映がない、支援する側の視点中心

私たち抜き・・・
本人を尊重、声は聞いてる
っていうけれど・・・。

色んな取組あるようだが・・・
自分からみるとあってほしいものがない、
希望がもてない・・・
支援される一方、力をだせない

今後

企画・立案 → 実 施 → 評 価 → 改 善 → 成果 付加価値 統合的 発展

本人参画、意見を反映、本人の視点重視

フォーメーションを育てる

私たちも一緒に。
私たちの意見を聴いてくれる。
そのことがうれしい！ 安心。
自信と誇りが蘇る

自分に必要な取組が色々ある。
希望がかなっていく。
自分が活躍できる。元気がでる
お互いが楽しく、暮らしやすい地域に！

2020.2.22
認知症の本人の意見と能力を活かした生活継続のための
認知症施策の総合的な展開に関する調査研究事業報告会

静岡県の認知症施策

認知症の本人の声を起点とした取組

静岡県健康福祉部　長寿政策課

認知症施策推進大綱（基本的な考え方）

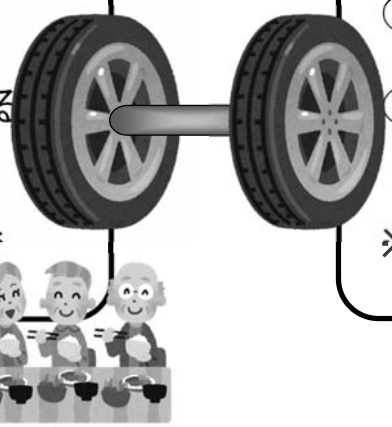
☆基本的な考え方☆

認知症の発症を遅らせ、認知症になっても希望を持って日常生活を過ごせる社会を目指し、認知症の人や家族の視点を重視しながら**「共生」**と**「予防」**を車の両輪として施策を推進

共　生

○認知症の人が、尊厳と希望を持って認知症とともに生きる

○認知症であっても なくても、同じ社会で ともに生きる



予　防

○認知症になるのを遅らせる

○認知症になっても進行を緩やかにする

※認知症にならないという意味ではない

2

認知症施策推進大綱の柱に沿った県の主な取組

5つの柱		主な取組	H30実績
Ⅰ	普及啓発・本人発信支援	・認知症サポーターの養成	累計331,719名
		・キャラバン・メイトの養成	累計3,461名
		・当事者や家族との意見交換会	県主催 1回
		・認知症の本人が語り合う全国の集いin静岡	来場者 720人
Ⅱ	予防	・通いの場の設置促進	参加率6.5%
		・認知症予防研修会の促進	先進事例の展開
Ⅲ	医療・ケア・介護サービス・介護者への支援	・認知症地域支援推進員の配置	全市町 165人
		・認知症初期集中支援チームの設置	全市町 82チーム
		・認知症疾患医療センターの運営支援	県指定11か所、政令市指定4か所
		・認知症連携パス(ふじのくに"ささえあい"手帳)の普及	認知症の人をみんなで支える地域づくり推進事業の連携強化事業で活用
		・かかりつけ医への認知症対応力向上研修	累計1,153名
		・認知症サポート医の養成	累計293名
		・認知症カフェの設置	31市町　160か所（H31.4）
		・認知症関係施設従事者向け研修	基礎研修、介護実践者養成研修等
Ⅳ	認知症バリアフリーの推進・若年性認知症の人への支援・社会参加支援	・県HPへの身元不明者情報の公開	新たに2名の身元判明（累計15名の身元判明）
		・若年性認知症相談窓口の運営（H28.7開設）	相談件数173件
		・若年性認知症居場所(仕事の場づくり)支援	モデル事業　3事業所実施
		・若年性認知症に関する企業出前講座	1事業所実施
Ⅴ	研究開発	―	―

これらの施策は全て認知症の人の視点に立って、認知症の人や家族の意見を踏まえて推進することを基本とする。

3

認知症の本人の声を聴くための課題

認知症の人の視点に立った施策とは・・・！？

◎認知症の本人が集い、本人同士が主体となって話し合う場のこと

◎その声を市町等が聴き認知症の人を理解し、地域づくりに活かすこと

⇒　両方を実現するにはどうしたらよいか・・・！？
そのために、県ができることは・・・！？

4

認知症の本人の声を聴くための課題

一足先に認知症になった本人の声に
耳を澄ませてみよう！

認知症とともに暮らす中で
どんな体験をし
何を思い
何を願っているのか。
何があったらいいか。

＊本当のことは、本人自身にしかわからない。
＊本人が、次に続く人に役立つ大切なことを伝えている。

出典：認知症介護研究・研修東京センター 永田久美子氏 資料

5

認知症のわたしたちが集い、語り合う、やさしいまちをいっしょにつくろう!!

本人ミーティングの開催

認知症の本人が集い、**本人同士が主になって、**自らの体験や希望、必要としていることを語り合い、**自分たちのこれからのよりよい暮らし、暮らしやすい地域のあり方を一緒に話し合う場**

●本人ミーティングのねらい

●三島市における本人ミーティングの取組

＜場所＞
認知症カフェ

＜テーマ＞
・生活の中で工夫していること
・今後やってみたいこと

＜ご本人からの言葉＞
「少しぐらい忘れることはあっても気にしない。わからないことがあったら誰かに聞くし、困ったことも何とかしちゃうから大丈夫」
「人それぞれでいいの。」
「カレンダーにメモするのが一番忘れにくい。」
「今までしていた普通の生活を続けているだけ。」

取組を他市町に展開するため
⇒ 映像化、静岡県ホームページで公開

出典：本人ミーティング開催ガイドブック（一般財団法人長寿社会開発センター）、三島市作成資料

6

認知症の本人が語り合う全国の集いin静岡 の開催

～一足先に認知症になった私たちからあなたへ～

“認知症の本人”が主役となって、認知症の本人が真に必要とする支援体制や暮らしやすい地域について、**自らの声で発信**することにより、**認知症に対する理解促進**を図る“集い”を開催（鳥取県に次いで全国では２番目の開催）

●開催日・会場

平成30年10月８日(月・祝)
グランシップ 中ホール ほか (静岡市)

●主催

静岡県、日本認知症本人ワーキンググループ
認知症の人と家族の会静岡県支部　ほか

●県内外の認知症の本人による意見交換会（第１部）

・認知症の本人15人が参加（市町職員が聴講）
・認知症の本人同士が「暮らしやすいまちはどんなまち」をテーマに、想いを率直に語り合う

●公開シンポジウム（第２部） **720名が来場**

・三島市における本人ミーティングの取組紹介
・本人（7人）、支援者を交えたパネルディスカッション
・全国の集いからの発信
『いっしょにつくろう!暮らしやすいまち宣言』
・認知症の相談、啓発等のブース展示（22ブース）

『いっしょにつくろう！暮らしやすいまち宣言』

1　これまでの常識にとらわれず、前向きに暮らしていきましょう！
2　自分の力を活かして、一人ひとりが大切にしたい暮らしを続けていきましょう！
3　自分の思いや希望を伝えながら、暮らしやすいまちを一緒につくっていきましょう！

7

「認知症の本人が語り合う全国の集いin静岡」をスタートに！

◎市町や地域で、認知症の本人の声を聴いて施策や支援につなげる取組を促進

＜本年度の取組＞

◎認知症の本人の声を施策につなげるための静岡県合同ワークショップの開催
市町職員等を対象に、本人の声からアクションにつなげる方策を検討

◎認知症のピアサポート活動を支援
認知症の本人同士のピア活動を推進

◎若年性認知症の人の就労を支援
デイサービスにおける若年性認知症の人の就労メニューを考案

8

認知症の本人の声を施策につなげるための 静岡県合同ワークショップの開催

認知症施策推進大綱では、「認知症になっても希望を持って日常生活を過ごせる社会を目指す」、「施策は全て認知症の人の視点に立って、認知症の人やその家族の意見を踏まえて推進」
“認知症の本人”の声を聴いて、施策につなげる取組を進めていくことを目的に開催

●開催日・会場
令和元年11月14日(木) レイアップ御幸町ビル(静岡市)

●主催
静岡県、日本認知症本人ワーキンググループ

●参加者 104名
市町、地域包括支援センター、認知症介護指導者
認知症疾患医療センター、認知症の人と家族の会

●内容
◎本人の声を聴いて活かす～これからの認知症施策～
認知症介護研究・研修東京センター 永田研究部長
◎本人の声を聴いて活かす取組の紹介
藤枝市、中東遠総合医療センター、和歌山県御坊市
◎本人とともに ミニシンポジウム（3名の本人と対談）
◎グループワーク
「本人の声を聴くための工夫」

【本人の声】
・仕事が楽しい。体調管理をちゃんとして、これからも自分の好きな山登りがしたい。
・家でテレビを見ているだけでは物足りない。体が元気な間は仕事がしたい。後ろを向くのではなく、前を向いていたい。一歩前に踏み出すことを考えていきたい。
・どんな薬よりも、こうしてみなさんと出会い、つながりができることで元気になれる。

グループワークで
今後の施策を検討

9

（参考）はたらくデイサービス ＷＯＲＫＷＡＣについて 2018年4月～

こんなお仕事しています！ メンバー9名 50.60代3名ずつ 70代2人 80代1人

①にんにくの小分け 近所の就労A作業所へ週1回通います。

②洗車 他法人へ出向き1回2～3台を洗車をします。

③媒体紙の配布 月2回（隔週水木曜日）近隣に250部ほど配布しています。
新聞にチラシを折り込む、新聞を三つ折りにする、ポスティングできるようにまとめる。
これらの一連の作業を行います。

10

本人の声・意見を活かして実施している県の取組

ピアサポート活動支援事業①

ピアサポート活動支援事業とは

先に診断を受けその不安を乗り越え前向きに思いを共有できるピアサポーターが、
心理面、生活面に関する早期からの支援をするなど、認知症の本人による相談活動等を支援

＜静岡県のピアサポーター＞

区分	内容
氏　名	三浦　繁雄　さん（牧之原市）　※精米店に勤務
任　期	令和元年7月～（県委嘱）
役　割	本人ミーティングや家族会、認知症カフェなどへ参加し、本人や家族の悩みの共有や相談支援、本人同士の交流を実施
主な活動	・本人ミーティングへの参加・助言（牧之原市） ・認知症の人と家族の会や認知症カフェに参加（藤枝市、浜松市、静岡市等） ・認知症サポーターのステップアップ講座で講義（袋井市、菊川市、浜松市） ・医療従事者向け、看護職員向けの認知症対応力向上研修で講義（県）他

11

本人の声・意見を活かして実施している県の取組

ピアサポート活動支援事業②

先行的に実施する市町と連携・支援（県モデル事業）

区分	内容
東伊豆町	・「男性の集いの場」を開催（月１回）＜テーマ例＞運転免許返納を考える ・本人が主体による「出張駄菓子屋」を開催
富士宮市	・認知症地域支援推進員が関わり、「当事者の語ろう会」の開催を支援
藤枝市	・若年性認知症の人と家族の交流会「さくらの会」に、ピアサポーターが参加 ・認知症の人と共に考える認知症施策と地域づくりのための視察（名古屋）と振り返りの会にピアサポーターが参加
牧之原市	・市主催の本人ミーティングに、ピアサポーターが参加 ・認知症ケアパスの改訂にあたり、ピアサポーターが助言
浜松市	・認知症サポーター等を対象に、ピアサポーターが講演 ・若年性認知症家族会「レインボー」に、ピアサポーターが参加

※上記５市町では、認知症サポーターが地域で活動・活躍する場を拡げるため、認知症サポーターの活動を促進する体制（チームオレンジ）整備を合わせて実施

12

本人の声・意見を活かして実施している県の取組

若年性認知症ジョブサポート支援事業

若年性認知症ジョブサポート支援事業

※デイサービスにおける若年性認知症の人の就労メニューを考案し普及

区分	内容
ｱﾝｹｰﾄ調査	若年性認知症の人の働く場（軽作業）が提供できる企業調査(県内800社)
事業実施	・デイサービス事業所職員(委託事業者）による協力企業への訪問 （県内3地区　30社以上へ企業訪問） ・訪問先企業から、仕事の場（軽作業）の提供、情報収集、検証作業 ・デイサービス事業所で検証作業、課題整理。 ・若年性認知症向けデイサービスにおける就労メニューを考案
事例報告会	・デイサービス事業所、地域包括支援センター等向けに事業報告

↓

次年度	・上記3地区以外の地域でも事業実施 ・協力企業の拡大

↓

若年性認知症向けデイサービスの普及

→ **ピアサポート活動支援事業と合同の成果報告会を開催（３月）し、他地域へ横展開**

13

これまでの取組を通じて

①事業・取組の中で見出した（知ることができた）こと

・**本人ができることを捉えて、希望の循環を一緒につくることの大切さ**を学んだこと
・県の立場として、**県内市町が、本人の声を聴く取組の道筋を示すこと**ができたこと

②聞くこと・知るために工夫した点

・**認知症の一人ひとりが**、体験していること、感じていること、工夫していることを**語り合う場を設ける**
・**多くの市町（職員）が参加**できるよう、認知症の本人の**思いを聴く場を設ける**
・聴いて終わりではなく、**地域で何ができるかグループワークで話し合う場を設ける**

③協働・連携をした機関や人

・県内の市町行政、認知症の人や家族の会、認知症疾患医療センター
・県内外の認知症の本人（ピアサポーター）、認知症の本人が働く事業所
・日本認知症本人ワーキンググループ　ほか

④情報化（見える化）したもの・方法

・**共同宣言を参加者全員で唱和**。次に続く人たちが認知症になっても前向きに暮らしていけるまちをともに創っていくことの必要性を参加者全員で共有
・三島市の**本人ミーティングの取組経過の映像と全国の集いのプログラムをＤＶＤとして全市町等に配布、県ＨＰに映像を掲載**

14

本人の声・意見をこれから活かそうとしていること

＜来年度の取組＞

◎ **認知症のピアサポート活動を支援**
ピアサポーターを増やし、市町や地域の活動を支援

◎ **若年性認知症の人の就労を支援**
デイサービスにおける若年性認知症の人の就労メニューを考案・普及する取組を他地域で実施

◎ **認知症カフェで本人の声を聴く取組の推進**
認知症カフェなど本人や家族が集う場の活用を支援

◎ **広域での見守り・ＳＯＳ体制の効果検証**
安心して外出できるよう、見守り・ＳＯＳの広域連携体制を整備(本年度)し、体制充実や連携強化のため研修を実施

15

認知症カフェで本人の声を聴く取組の推進

◎県内各地に広がる“認知症カフェ”

・認知症の人と家族、地域住民等の誰もが 自由に参加できる「集いの場」
・介護者にとって、他の介護者との交流・ 情報交換の場となっており、負担軽減につながっている

平成28年４月時点
11市町、24箇所

→

平成31年4月時点
31市町、160箇所に増加

◎本人ミーティングの場や本人の声を聴く場としての活用を推進
◎本人がボランティアとして活動・活躍する場としての活用を推進

16

認知症になっても、
誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせるように
本人の声を起点とした「認知症にやさしい地域づくり」を推進します

令和元年９月20日に開催された
「ＲＵＮ伴2019」@県庁前
参加者 100名超

17

富国有徳の理想郷－しずおか
ふじのくに
Shizuoka Prefecture

ご清聴ありがとうございました

認知症の本人のチカラを活かした
地域アクション取り組み報告会

ピアサポーターと、本人の声を聴く仲間づくりや安心して話ができる環境づくりに向けた取組

いくつになっても笑顔で藤枝

～　みんなで支える地域の笑顔　～

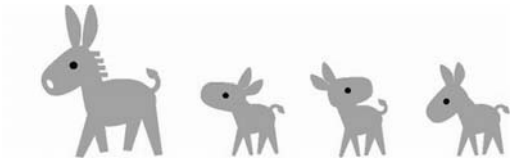
藤枝市　健康福祉部地域包括ケア推進課
認知症地域支援推進員　横山　麻衣

本日の内容

1　藤枝市の概況

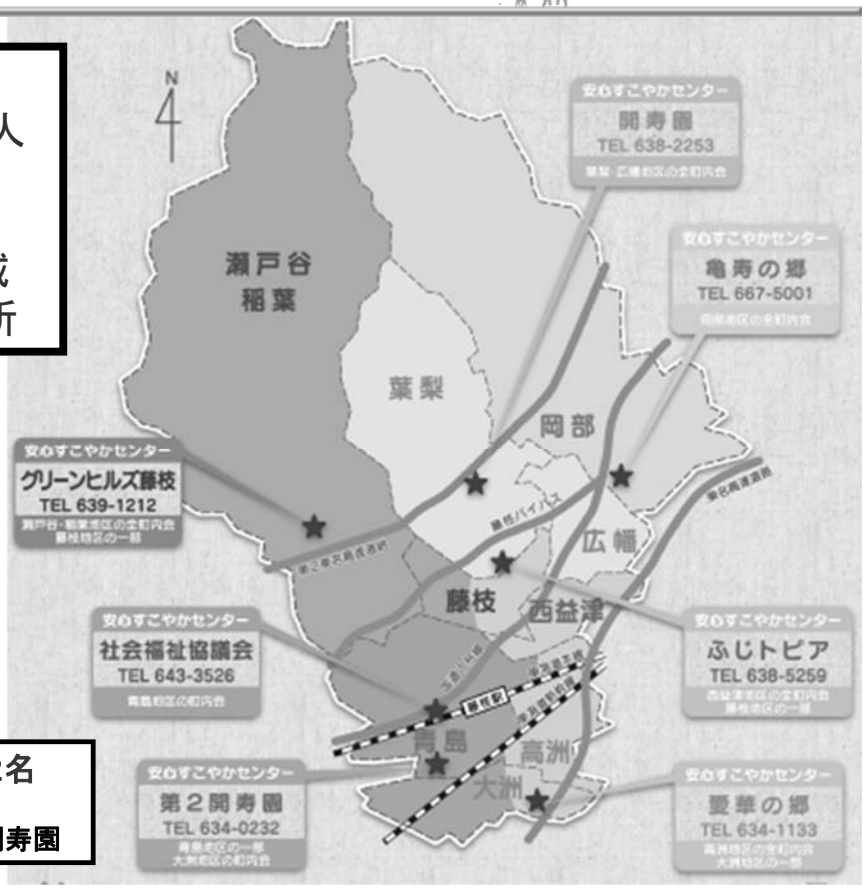
2　藤枝市の認知症施策

3　具体的な取組の報告



2

人 口:144,900人
高齢者人口:42,794人
高齢化率:29.5%
(令和元年9月1日現在)
日常生活圏域:9圏域
地域包括支援センター:7か所



認知症地域支援推進員　2名
【専任】市地域包括ケア推進課
【兼任】地域包括支援センター開寿園

藤枝市の介護の実際

地域包括ケアシステム構築のための最優先課題
在宅医療・介護の連携
要介護認定者約5,000人は施設外において医療・介護の連携で支えている

1号被保険者認定　6,636人

特養508床
老健500床

GH
180床

・サ高住233人
・有料老人ホーム
220人

自立高齢者
36,158人

65歳以上
42,794人

総人口	144,900人	
高齢者人口	(再掲)42,794人	29.5%
要介護認定	(再掲)　6,636人	15.5%

人口:令和元年9月1日現在(住民基本台帳)
認定者数:令和元年8月事業状況報告より
(2号被保険者　認定者　147人除く)

生産年齢人口
83,333人

年少人口
18,773人

4　4

藤枝市の認知症施策

第7次ふじえだ介護・福祉ぷらん21（平成30年度～令和2年度）

～認知症になっても安心して暮らせるまち～

❤ふじえだ❤

【認知症の人と家族の視点の重視】

「認知症の人と家族の声」を施策に反映させることを基本として、4つの視点で認知症施策を展開しています

- Ⅰ すまいとすまい方
- Ⅱ 支える
- Ⅲ つなぐ
- Ⅳ 防ぐ

5

藤枝市の認知症施策

つなぐ

- 認知症疾患医療センターとの連携強化
- 認知症支援ネットワークガイド第４版の活用
- 認知症地域支援推進員の養成とそれを活用した認知症施策の推進

防ぐ

- アクティブシニアチェック
- アクティブシニア大学・ＯＢ会
- ふじえだアクティブクラブ
- 介護予防普及啓発講座

支える

- 認知症支えあい相談コールセンター事業
- 認知症の人を介護する家族のための交流会（ケアラーズカフェ）
- 認知症の人や家族が集う場所への協力
- 介護マークの普及・啓発
- 徘徊高齢者家族支援サービス
- 認知症見守りネットワーク事業
- 若年性認知症の人と家族の交流会「さくらの会」
- 認知症サポーター養成事業
- この指止まれ大作戦（認知症の人と家族の支援を一緒に考える会）
- 認知症初期集中支援事業

すまいとすまい方

本人や家族の意思を尊重した住まい方の支援

認知症の人と家族の声・本人・家族ミーティングや こころの声アンケート を

【認知症の人と家族の視点の重視】 とおし、定期的に本人と家族の声を聴く取り組みを行います。

6

平成28年度　こころの声アンケート概要

1．背景

- 認知症施策は認知症の人や家族の視点に立ったものになっているか【新オレンジプラン⑦　認知症の人やその家族の視点の重視】
- 資源に必要な人が繋がっていない・・・本当に本人にとって必要な資源なのか
- 認知症の人や家族の声をしっかり聞けていない
- 上記の課題を感じ、大崎市の取組を聞いたことが実施のきっかけとなった

2．アンケートの目的

- 認知症になっても安心して暮らせるまちづくりを推進するため、
- 認知症の人と家族の声を聴き、地域で暮らしていく上でのニーズの把握や課題について明らかにし、
- 認知症の人や家族の視点を認知症ケアパスの作成や認知症施策へ反映させる

平成28年度　こころの声アンケート結果

結果分析～本人の声からみえること～

- 嬉しいこと

【KEYWORD】

・人から頼まれごとをしたとき・人と触れ合うこと・人の役に立ったとき
・ひ孫といること・将棋で勝ったら嬉しい・昔の友人に会えるとき
・杖で歩けるようになったこと・米寿のお祝いをしてもらったこと・家族が健康なこと

- わたしのやりたいことや願い

【KEYWORD】

・できることなら自分1人でいろんなところに行きたい・盆栽と散歩
・岡部の先生のところで染物をしたい・焼津の友人に会いたい
・グランドゴルフの仲間に再び入りたい・土いじり（花や木を育てること）

- 得意なこと

【KEYWORD】

・大正琴・詩吟・釣った魚をさばく・洋裁（ズボンやブラウスを作ること）・お料理が大好き
・頼まれればなんでもやる・部屋の金具の取り付け・洗濯物をたたむ・グランドゴルフ
・歌を歌うこと

結果分析～本人の声からみえること～

- 生きがい

【KEYWORD】

・人から頼られたり、「やって」と言われると頑張れる・100歳までいきること
・人から洋裁の仕事を頼まれると嬉しいし、頑張れる・愛妻との時間
・将棋をやっているとき・お金があれば勉強したい・元気で野菜づくりをすること
・孫が成功するまで元気でいてあげたい

・特別なことでなく、あたりまえのこと！
→本人の声を地域に届けたい、一緒に届ける仲間を増やしたい
・そのあたりまえのことをみんなで支える地域づくり
→1人を支える顔の見える関係作り
・本人の声を聴ける仲間を増やしたい
→まずはケアマネジャーと一緒に考える機会を作りたい

H29年～ **この指とまれ大作戦**（認知症の人と家族の支援を一緒に考える会）

この指止まれ大作戦（認知症の人と家族の支援を一緒に考える会）概要

平成29年からケアマネジャーと共に、認知症の人と家族の声を聴く体制づくりと、本人の声から望むケアの実現に向けた取り組みを推進

平成30年度	内　容
第1回	【参加者：家族とケアマネジャー】 ・家族の声を聴く【こころの声アンケートの実施】・家族への支援を考える
第2回	【参加者：家族】 ・第1回で家族が話をした感想や、家族同士で思いを共有し、振り返る機会を設け、“家族の声”をさらに深める
第3回	【参加者：ケアマネジャー・認知症キャラバンメイト】藤枝市介護支援研究会・地域包括ケア推進課共催 『一足先に認知症になった皆さんからいただいた思いをあなたへ ～「聴く力」がアクション能動につながるように～』 登壇者：当事者の立場から　三浦　繁雄　氏 講　師：名古屋市認知症相談支援センター　鬼頭　史樹　氏

第１回　ケアマネジャーの感想

・認知症の人が住みやすいように、地域への普及啓発や地域づくりの必要性を感じた、取り組みたい
・これだけ介護保険や認知症のことが言われているのに、皆に周知されていないものなんだと感じた
・最期をどうするかについて考える必要性を再確認した

第１回
グループワークの様子

この指止まれ大作戦（認知症の人と家族の支援を一緒に考える会）概要

第３回
『一足先に認知症になった皆さんからいただいた思いをあなたへ
～「聴く力」がアクション能動につながるように～』

～三浦繁雄氏からメッセージ～

「認知症と診断されると“危ないからやってはいけない、こうしてあげよう”等、周りは本人を守ろうとする。でも、本人にもリスクを負う権利がある。リスクを恐れないで本人のやりたいことは本人の責任でやらせてあげよう」

「(当事者の声を)聴いてもらわないと本人が見えない、聴いたら、我が事として何らかの形でアクションに繋げてほしい」

～認知症当事者とともにつくる地域～

名古屋市認知症相談支援センター　鬼頭史樹　氏

・支えられるばかりではない、支え合う関係“パートナー”
・当事者同士が出会い、ともに認知症に向き合っていく仲間づくりができる場、地域・社会とつながり、活動が広がる場が必要
・本人ミーティングをきっかけに、本人が地域づくりにかかわっていく環境を！！！

⇒ 令和元年度アクションへ！！

令和元年度　この指止まれ大作戦
声を聴くための仲間づくり～ケアマネジャーとの協働～

当事者同士が出会い、安心して話ができる場
本人の声を聴く環境づくりに向けて
どのようにアクションに繋げるか・・・

～ケアマネジャー（介護支援研究会認知症研修担当）と相談～

・本人ミーティングって何？
・どんな人が参加するの？
・認知症であることを自覚して、話すことに抵抗があるのでは？
・どうやって声をかけたらいいか分からない
・声かけやすい企画が良いのでは？

⇒三浦さん（静岡県ピアサポーター）に相談

・本人ミーティングは目的ではない　大切なのは本人同士の出会いや話せる環境
・そのために、まず、当事者同士が出会うことがなぜ大切か・・・を学びたい！
・当事者の立場から、話をしてほしい

⇒ ～三浦さんからの提案～
「勉強会するのもいいと思うけど、自分も（当事者の集まりに）参加してみて、“あっ、こういうことなんだ”って分かった。行ってみた方が分かると思う」

令和元年度　この指止まれ大作戦
声を聴くための仲間づくり～ケアマネジャーやグループホームとの協働～

本人ミーティングは“手段“

本人同士の交流が“なぜ大切か“共有し、ともに考える、仲間を増やしたい

若年性認知症の人と家族の会あゆみの会（名古屋）へ参加

メンバー：CM3名（介護支援研究会）　グループホーム2名　当事者1名　行政2名

【大切にしていること】
- 当事者の**やりたいことを大切**に、やりたいことを実現するために、**みんなでいっしょに**考えます。
- みんながいち参加者。
- 自分のことはできるだけ自分で！
- とにかく**“楽しく”がモットー**です！

パートナーって？

当事者といっしょに楽しく活動している医療や福祉の専門職や学生のボランティア

“サポーター”だと当事者との関係性が**「支える側と支えられる側」という一方通行**の関係

“パートナー”という名称にこめられた思いは**「仲間」「いっしょに活動する」「お互いに助け合う」**という**双方向の関係性**

⇒ **初めは戸惑い“声掛けした方がいいかな・・・”“何とかしなくちゃ・・・”**
戸惑いながらも、当事者や家族、パートナーがともに楽しむ様子が気づきへ！

令和元年度　この指止まれ大作戦
安心して話せる環境づくりから～ともに楽しむ～

視察の振り返り
参加して感じたことの共有

～参加者の声～
- サポートしようという考え方が変わった
- 共に楽しむことが大事だと感じた
- “（認知症の人を）一人にして大丈夫？”という思いがあったが、“これでいいんだ“と思った。思い込みだったことに気づいた。
- （本人ミーティングについて）やらなければ・・・という使命感があったが、それが間違いだった。⇒本人ミーティングは“手段”
- 当事者同士が安心して集まることができる場があると良い
  ⇒（認知症を）本人だけでなく、仲間の課題と思える
- （困りごとではなく）やりたいことを聞いてみよう！

共有

～ここからスタート～
まずは、安心して話ができる場づくり（環境づくり）から始めよう！
本人ミーティングはそれから・・・
そして、そこから本人の“やりたいこと”を実現できる仲間づくりへ！

まずは、安心して話ができる場づくり
（環境づくり）から始めよう！

・まずは、集まってみよう！
・それぞれの“やりたいこと”を言い合おう、自分たちも
　⇒実現に向けて
・１回で終わる会ではないよね⇒関係づくりから

・支援者の目線から、少しずつ当事者の目線へ変化
・“自分たちも“⇒支えるから、ともに
・“本人ミーティングやらなきゃ！”
　⇒大切なのは当事者が安心して話せる環境！

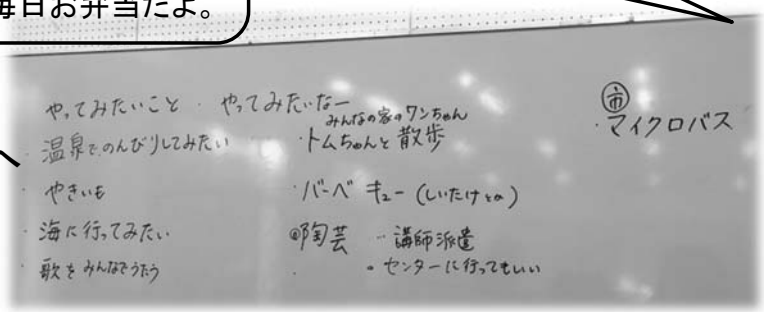
令和元年度　この指止まれ大作戦
安心して話せる環境づくりから～ともに楽しむ～

まずは集まってみよう

参加者：当事者5名　家族3名　CM等6名　市3名

わたしは毎日忙しいの。
週に5日もデイサービスに行ってる。
息子のため、心配するから仕方ない。
（ご飯）一人だと、作るのもね・・・毎日お弁当だよ。

じゃあいくよ！
♪～♪～♪～♪～♪
みんな一緒っていいよね



新たな一面の発見！

①他の参加者と一緒に散歩へ
→家族と離れて過ごすことは
　難しいと思っていたが

②一緒に参加した妻が当事者同士で交流する本人を見て
「主人はこうやって仕事をしてきたんだ。まだまだできることがあるんだ」
さらに、提案する姿を見て
「こうやって生きてきた人なんだ、まだまだ力があるんだ」
→ケアマネジャーとも共有

令和元年度　この指止まれ大作戦
日常の中で本人の声を聴く

グループホームでも話し合ってみよう！
～本人とともに過ごして感じたこと～

・みんなすごい可能性を秘めている！
・まだまだできることがたくさんある！
・特別なことをしなくても、本人の声を聴く機会は日常の中にある！
・機会や関係を重ね、色んなことを相談したり、声が聞きたい！

これから、関係を重ねながら・・・
・小学校の福祉教育：子どもたちにどんなこと伝えていきたい？
・認知症ケアパス：よりよく暮らしていくために必要なことって何だろう？
・認知症サポーター養成講座：どんなことを伝えたい？知ってもらいたい？

上記をグループホーム職員に伝えてみた・・・
・これまで、本人に認知症の話をすることはタブーに感じていた
・そういう視点で本人の声を聴くって普通のことだよね
・自分たちが特別視していたんだ
→日常の中で本人の声を聴ける仕組みづくりへ

令和元年度　この指止まれ大作戦
取組の共有と仲間づくり

今年度の自分たちの取組をみんなに伝えよう！
～令和元年度介護支援研究会の研修に向けて～

～打ち合わせでの声～
・視察に行ったこと、本人同士で交流したことを伝えたい
・視察に行ったみんなに感じたことを話してほしい
・少しずつ輪が広がっていくと良い
・継続的に行い、報告（共有）していけると良い
・昨年の研修から繋げていきたい

平成３０年度
『一足先に認知症になった皆さんからいただいた思いをあなたへ
～「聴く力」がアクション能動につながるように～』

↓

令和元年度
『一足先に認知症になった皆さんからいただいた思いをあなたへ　その２
～アクションに向けてのはじめの一歩～』

令和元年度　この指止まれ大作戦
取組の共有と仲間づくり

令和元年度
『一足先に認知症になった皆さんからいただいた思いをあなたへ　その２
～アクションに向けてのはじめの一歩～』

～視察・本人ミーティング報告～

- 知っている人と楽しいことをすることが最も安心できることを実感した。
- 何かしてあげようではなく、協力して一緒に楽しく事が大切、仲間が大切
- （当事者同士の交流の場を）続けていきたい
- （本人ミーティングに）誘う時に、認知症という言葉を使わずに誘った、認知症に対して自分が垣根を作っていたのかもしれない

～アンケートより～

- 本人ミーティングというものを知る事ができた。機会があれば参加してみたい。
- 認知症は特別な病気ではない。ラベルを貼ったのは専門職の人たちという言葉が響きました。
- 特別じゃない今までの生活の継続、そのサポートが大事という言葉が良かった。
- 本人のやりたいことは本人の責任でやらせてあげたいと思う。
- 認知症に対しての知識と理解をどうしたら良いのかを再度考えさせられました。「自分だったらどうしようか」をしっかり考えてみたいと思う。

認知症とともに生きる
希望宣言

令和元年度この指止まれ大作戦
地域に本人の声を届ける

～共有しよう！～

- 当事者が求める支援の在り方や地域について
- これからの認知症になってからの生き方・支え合い方について
- それぞれの立場で当事者とともにできることを

市民、ケアマネジャー、
キャラバン・メイト、
認知症の人に優しいお店、
認知症の本人や家族、
地域包括支援センター職員等
多様な立場の80名が参加！

シンポジウム　テーマ：認知症の人とともに考える～認知症になっても安心して暮らせるまち～

シンポジスト：認知症の本人　三浦繁雄氏

平成26年に軽度認知障害の診断を受け、退職した。
他の認知症当事者との出会いが、前向きになるきっかけとなり、精米店に再就職し、生活の中で工夫を凝らしながら、ている。当事者からのアドバイスを受け、認知症であることを、周囲に伝え、日常の中で、困りごとはあるが、できないことより“やりたいこと”を大切にしている。**認知症になっての特効薬は『ひとぐすり』である。どの薬よりも、みんなと会ったり、繋がることで元気になる。人と関わることが一番の薬になる。認知症の人に対して“こんなことをさせてあげよう”ではなく認知症の人の“こんなことがしたい”を大切にしてほしい。**

令和元年度この指止まれ大作戦
地域に本人の声を届ける

シンポジウム　テーマ：認知症の人とともに考える～認知症になっても安心して暮らせるまち～

シンポジスト：認知症の人に優しい事業所
株式会社 薮崎新聞店　松浦 孝司 氏

平成26年に認知症サポーター養成講座を受講し、新聞販売店として認知症の人にできることは何かを考え、配達中に“あれ、おかしいな？”と感じたら、声をかける、歩行者信号を押さずに待っている人がいたら手を差し伸べる、外灯が切れていたら交換するのを手伝う等、出来ることを行い、月に1回の社内の定例会で活動の報告を行っている。

シンポジスト：認知症の人に優しい事業所
広幡郵便局　石原 義則 氏

平成27年から認知症サポーター養成講座を定期的に受講しており、認知症と思われる人や高齢者に対する職員の対応時の意識の変化を感じている。窓口での対応や、配達中の見守りだけでなく、市内の各郵便局に防災士の資格を持つ職員を配置しており、地域の拠点として幅広く活動を展開している。

この指止まれ大作戦　令和元年度の取組
～ピアサポーターの活躍・県との協働～

シンポジウム　テーマ：認知症の人とともに考える～認知症になっても安心して暮らせるまち～

コーディネーター：名古屋市認知症相談支援センター　鬼頭 史樹 氏

認知症の人に優しいお店・事業所が見守り等の活動を仕事として役割として当たり前に行っている。それぞれの立場で、地域に何ができるかを考え、やれるところから取組んでいる。このそれぞれの取組が“優しいまち”に繋がっていく。

これまでは認知症の人との関係性の中で「そのひと“に”何ができるか」を考えてきたが、これからは「そのひと“と”何ができるか」を考えていきたい。“for”から“with”への発想の転換が求められている。

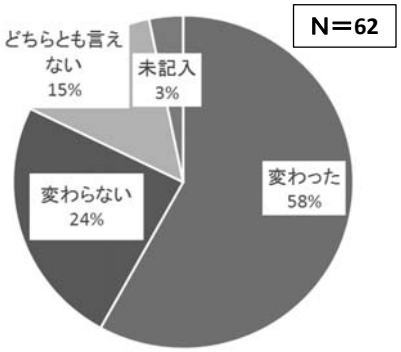
グループワーク

立場を越えて感想を話し合い、シンポジストへの質問を行いながら、本人の声、安心して暮らせるまちづくりに向けた考えを深めました。

令和元年度この指止まれ大作戦
地域に本人の声を届ける

参加者の声～アンケートの結果よりみえるもの～
・ワークショップに参加して認知症に対するイメージが変わりましたか？

参加者	80人
アンケート回答者	62人
回収率	76%



【変わった】36人 58%
- 変わったというより、認知症の方を特別と思わず、共に生きていく近隣の人という思いを強くした。
- 「サポートしてあげなくては」「助けてあげなくては」という意識を持っていたが、「一緒に生きていく」という意識を持っていくことが大事
- 認知症の人が何もできないと思っていたが、出来ることはある。
- “助ける”ではなく、認知症がある普通の人として一緒に考える事が大切だと本人の話を聞いて痛感した。
- 認知症とともに生きる人なんだっていう事
- 認知症を明るく、前向きに捉え、お仕事までしている人がいることにびっくりしました。

【変わらない】15人 24%
- かつてヘルパーをしていたので、認知症の知識がある。
- 特別な方と捉えず、一歩先行く先輩として捉えています。

【どちらとも言えない】9人 15%
- ますます解らなくなった。・まだ十分に理解できていない

令和元年度この指止まれ大作戦
地域に本人の声を届ける

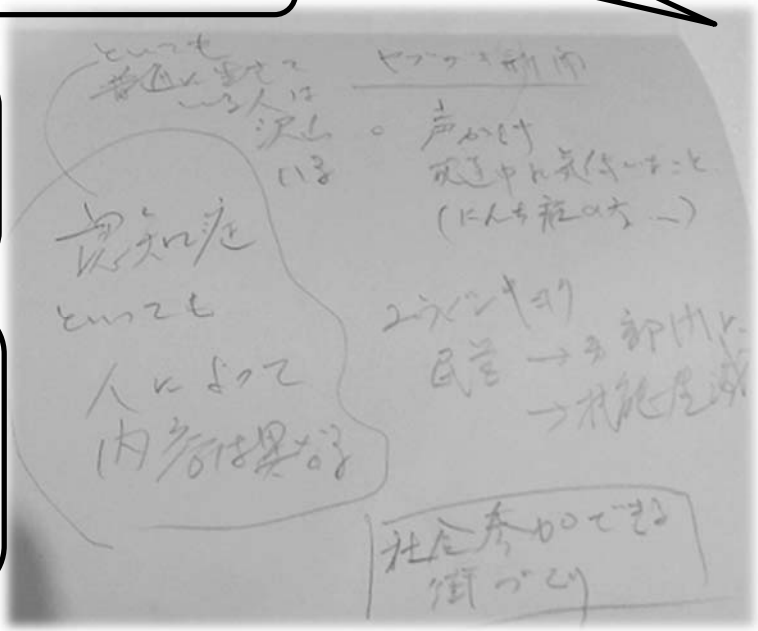
当事者も参加

くよくよするより前に進む。

私ばっかりじゃないんだって勇気づけられた。
経験したことを話してくれる機会があると嬉しい。

私もそう思う。

自分では、物忘れを心配に思っているけど、先生からは年齢によるものだと説明を受けた・・・でも、おかしい



蓮華寺を歩き回っている。
徘徊士だ。
安心して徘徊している。
自分の家に帰れることが、社会参加できるまちづくりの原点だと思った。

ピアサポーターの活躍～県との協働～

ピアサポーターの活躍
～今年度の取組を振り返って～

- 本人が声を発信できる環境が十分に整っていない中で、当事者視点での取組の推進に繋がった。
  →声を聴く仲間づくり、安心して話せる環境づくり
- 地域に本人の声を届けることで発想の転換に向けた第1歩を踏み出せた。
  それにより、他の当事者との繋がりや希望にも繋がった。
  →本人が安心して話せる環境づくりに繋がっていく
  また、家族の発想の転換にも繋がった。
  →本人への理解促進へ

“介護保険の申請をしなくても、大丈夫だと思った。（話を聞いて）すっきりした”

- ピアサポーターを通して、他市町の取組を知ることができる

本人の発信や活動は
“希望を持って認知症とともに生きる”“同じ社会でともに生きる”ための
地域づくりを何よりも推進する

市町の立場から考える
県のピアサポート活動支援事業

◆ 市町の“認知症とともに生きる”“同じ社会でともに生きる”ための地域づくりを後押し（加速）してくれる貴重な事業。

◆ 事業を通して、認知症の人の視点に立った施策に向けて市町の現状や、ニーズ、課題を県と共有できる
→より地域の実情に合った施策の展開へ

◆ 他市町の“本人の声を活かした取組”を知ることで、自分の市町の取組にも活かすことができ、多様な視点で本人の声を施策に繋げることができる。

ピアサポート活動支援事業は、
市町の認知症施策における本人参画の加速と、
本人の意見を多様な視点から、施策に反映できる可能性のある事業

認知症の本人の意見と能力を活かした
生活継続のための認知症施策の
総合的な展開に関する調査研究

兵庫県
マスコット
はばたん

兵庫県北播磨圏域の取り組み

加東健康福祉事務所
認知症対策業務嘱託員
林谷啓美

【本日の発表内容】

1．兵庫県北播磨圏域の紹介

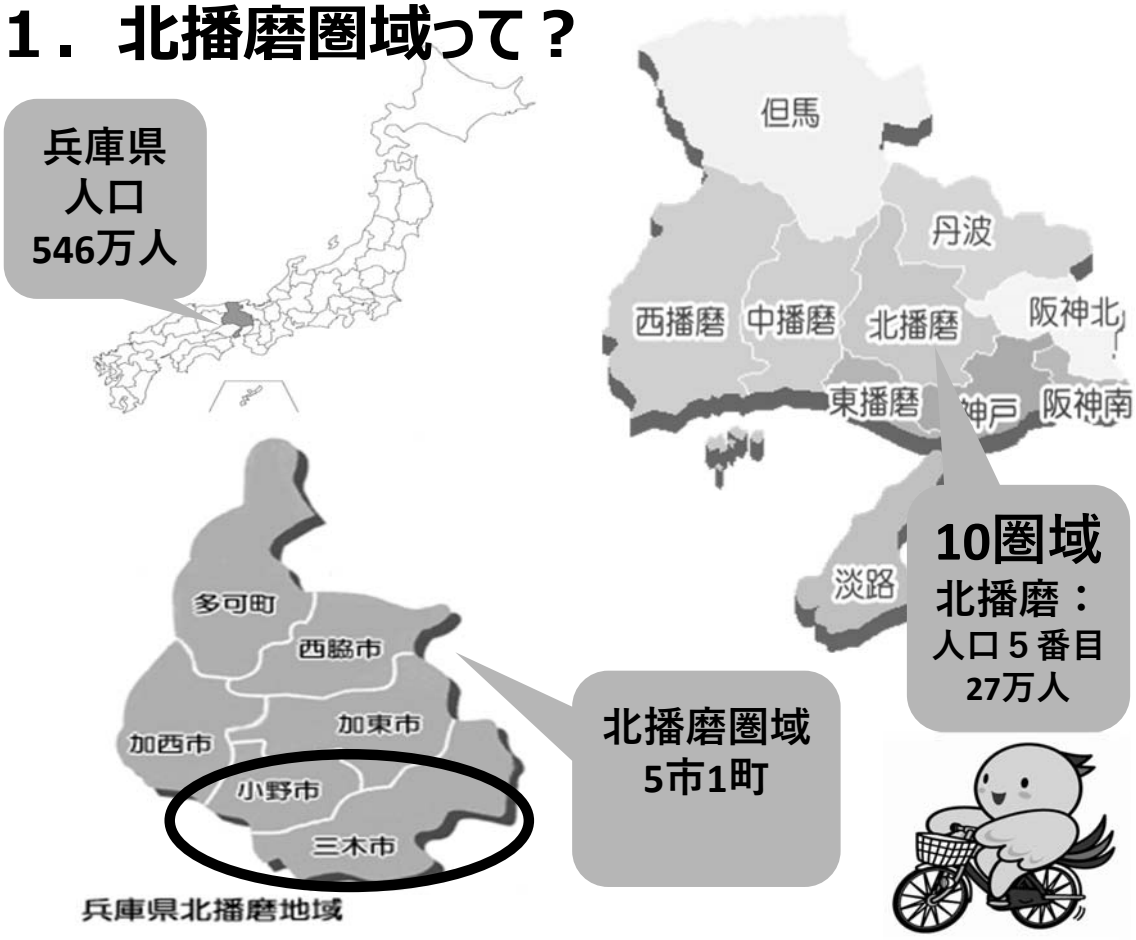
2．加東健康事務所からの活動報告

3．三木市からの活動報告

4．小野市からの活動報告

5．まとめ

1．北播磨圏域って？



2.北播磨圏域の概要

面積			895.61㎢
国勢調査人口	（2010年）		284,769人
	（2015年）		272,447人
人口増減率（2010～2015年）		（※）	-4.33％ -0.75％
高齢化率（65歳以上・2015年）		（※）	29.70％ 26.60％
人口密度（2015年）		（※）	304.20人／㎢ 340.80人／㎢

（※）比較地域：全国平均

3.北播磨圏域の特産物

４．北播磨県民局 加東健康事務所

１） 所在地：加東市

２） 認知症に関する事業：企画課

３） 認知症対策としての人員を確保：
兵庫県内において北播磨県民局のみ

４） 事業の目的：認知症に関わる人材の育成

５） 主な事業内容：

（１）認知症カフェの設置・継続支援

（２）認知症機能アセスメントシステムの
普及・啓発　　等

5．認知症カフェについて

1）「絆カフェ」として親しまれている
2）「多世代交流」を目的とする
3）認知症カフェ設立支援
（1団体30万円/初年度のみ）
4）北播磨圏域認知症カフェ連絡会(2回/年)
1回：市町が開催
1回：本事務所が開催

認知症の人の声を聴く機会にしては。

5．認知症カフェについて
5）北播磨圏域
認知症カフェ
連絡会

テーマ：
地域の絆の深め方
～認知症の人の声を聞こう～

令和元年
北播磨認知症カフェ連絡会

✽北播磨では、認知症の方やその家族、介護･医療専門職、地域の方がつどい、交流や相談、情報交換ができる身近な居場所として、また世代間交流を特徴とした**"地域共生型認知症カフェ"**を**「絆カフェ」**として、その設置を推進しています。
✽すべての人がいきいきと暮らせる地域づくりを進めるため、今回は、認知症カフェの取り組みを通して、**地域の絆の深め方～認知症の人の声を聞こう～**について考えてみませんか。

日　時　：令和元年10月29日　(火)　13：30～15：30
場　所　：小野市うるおい交流館エクラ　市民交流ホールA
対　象　：　認知症カフェに興味がある方、認知症カフェ設置者
市市町・地域包括支援センターの職員

～第１部～　カフェ実践報告（13：35～14：25）
1）絆カフェなごやか（加西市）
2）絆カフェ笑日（わらび）（加西市）
3）絆カフェ地域交流カフェ～結～ゆい（小野市）

～第2部～　シンポジウム（14：35～15：25）
「そうだ！みんなで考えよう。地域の絆の深め方
～認知症の人の声を聞こう～　」
コーディネーター
健康福祉部参事(認知症対策担当)兼認知症対策室長
柿木　達也　氏

◆申し込み方法：別紙 申込書にて
加東健康福祉事務所宛　FAX

5）連絡会出演の認知症カフェ
加西市　絆カフェ「笑日」（わらび）

訪問
しました

（1）自治会とコラボ
（2）日頃から認知症の人の思いを聴いている。
「1人暮らしが寂しい。1人で晩ごはん食べるのが寂しい。」という認知症の人の思い

昼カフェから
夜カフェへ
みんなで晩ごはんを
一緒に食べよう。

共催：社会福祉法人ゆたか会
小規模多機能型居宅介護どっこいしょ

5）連絡会出演の認知症カフェ

訪問
した日の
こと

（3）日頃から、1人1人が尊重される場
①夏まつりで出すドリンク：
みんなで試飲して話し合って決める。

タピオカラズベリー
ドリンク。
ラズベリーは
地の物。

②認知症の人が料理作りから参加
③晩ごはん：バイキング形式

５）連絡会出演の認知症カフェ

【実践報告】
　80歳代の女性2名が発言
【シンポジウム】
　80歳代の女性シンポジストとして
　「長生きします。」会場からの拍手

参加者の感想：今日の連絡会が一番良かった。
　　認知症の人の声が聞けて良かった。

（１）認知症の人の声を聴くことを意識化する
（２）認知症の人の声を聴く仕組みをつくる
（３）そのうちそれが当たり前に。

三木市・小野市からの報告

認知症の本人の意見と能力を活かした生活継続のための
認知症施策の総合的な展開に関する調査研究事業

三木市の取組
認知症の本人の声を届ける

兵庫県三木市健康福祉部　介護保険課　　三木市中央地域包括支援センター

三木市の認知症施策

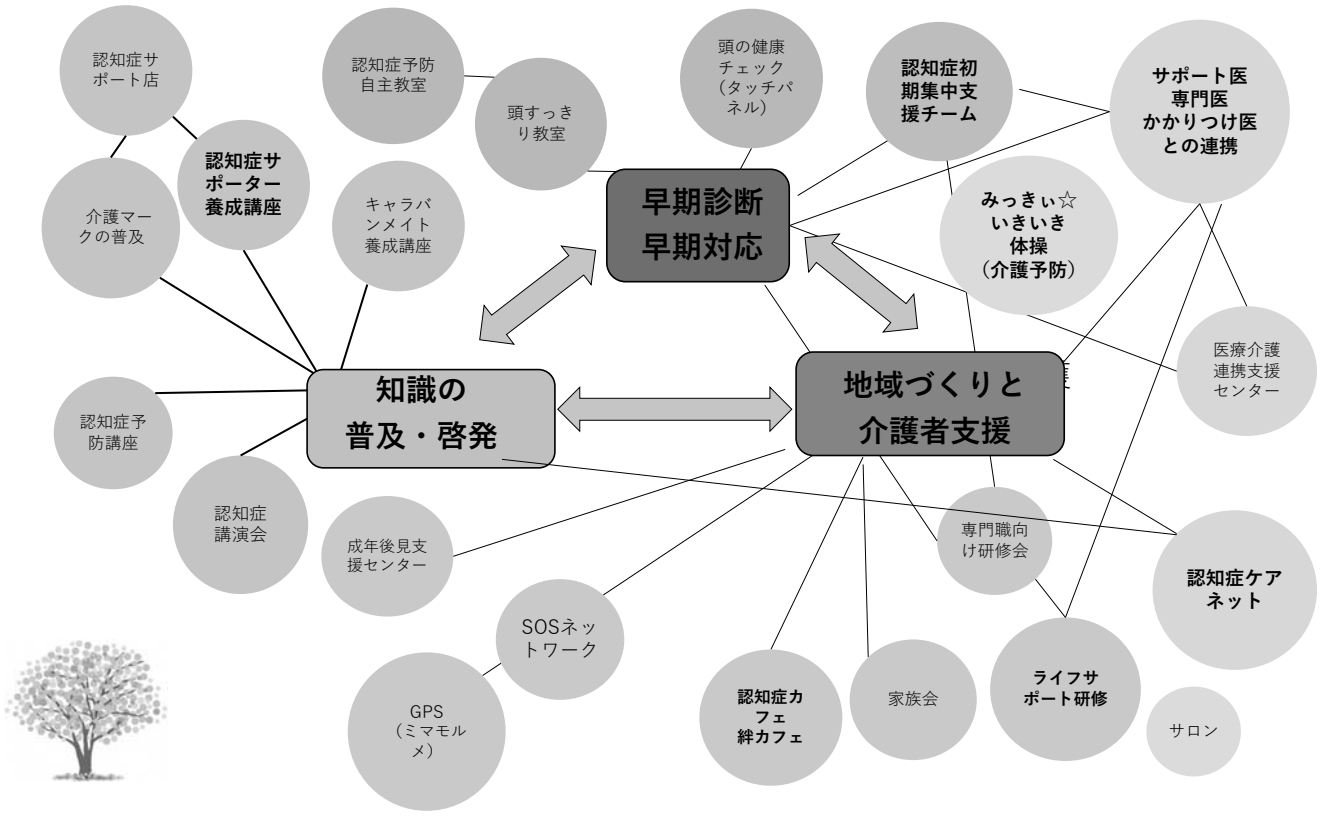
三木市高齢者福祉計画　第７期介護保険事業計画

高齢者が尊厳と生きがいを持って、
住み慣れた地域の中で暮らし続けられるよう
支え合う三木を目指します

①認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進

②認知症の早期診断・早期対応に向けた体制の整備

③高齢者にやさしい地域づくりと介護者への支援



認知症の人の声を広く届ける 認知症市民フォーラムを開催

「認知症について話をしよう～私からあなたへ～」

認知症のご本人と、地域で生きがいの場を作る支援者との講演会を開催。

認知症とともに生きる
佐藤　雅彦さん

「不便だけれども不幸ではない」
「できることが少なくなっても、見下すのではなく、
尊い存在だと思って接してもらいたい」
「こども扱いせず、立派な大人として接してもらいたい」

どのような社会が住みよいか？の質問に
**「道に迷ったときに『何かお困りですか？』と
声をかけてくれるやさしい社会」**

認知症の人と共に
地域で生きがいの場を作る
若野達也さん

「住民と当事者が顔を合わせる機会が大事。
地域で受け入れる場所を考え、つくって」

認知症の人の声を広く届ける

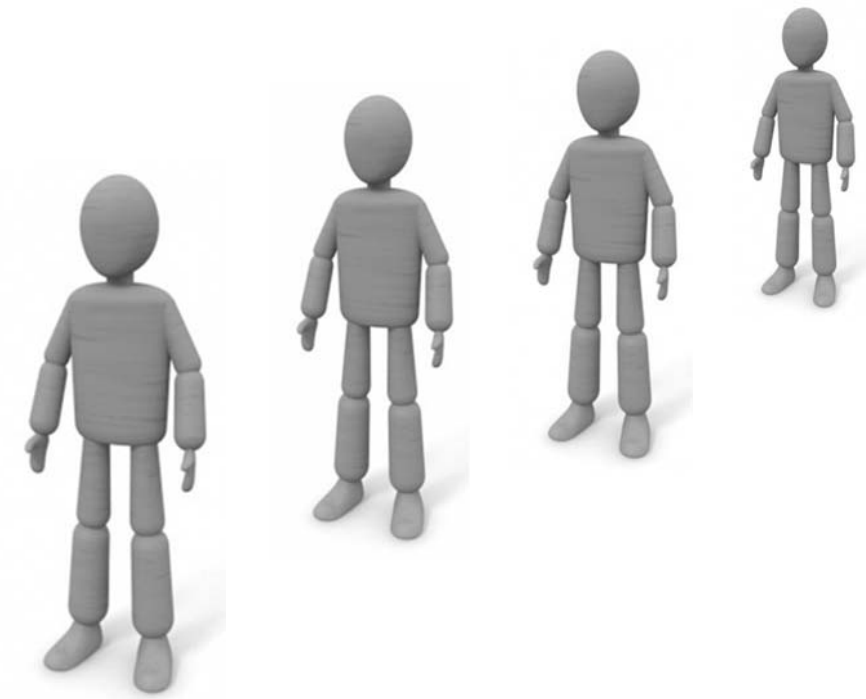
どのような社会が住みよいか？の質問に
「道に迷ったときに『何かお困りですか？』と
声をかけてくれるやさしい社会」

認知症サポーター養成講座

養成講座では、佐藤さんのそのままの言葉を伝える。
受講生の心に入りやすい

「道に迷ったときには声をかけるやさしい社会を作りましょう」

ご本人の声を聴く機会はどうやって・・・？

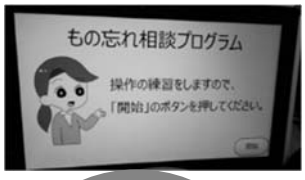


悩

ご本人の声を聴く機会はどうやって？

ヒントは、すでにある仕組みの中に！

なんだ！特別なことではなく、普段の相談支援や
業務の中でも十分声を聴く機会はあるはず



月に１度の
頭の健康
チェック

包括が毎月行
くグループ
ホームの運営
推進会議の場

認知症
カフェで

毎日の
相談業務

ご本人の声を聴く

「頭の健康チェック」を
してみませんか！

『物忘れが多くなってきた？』
『あれ？おかしいな…』と
思うことはありませんか！？
タッチパネル【物忘れ相談プログラム】を活用して
頭の健康チェックに　チャレンジしてみましょう！！

■と　き　概ね第３水曜日

平成３０年４月１８日	５月１６日	６月２０日
７月１８日	８月２２日	９月１９日
１０月１７日	１１月２１日	１２月１９日
平成３１年１月１６日	２月２０日	３月２０日

※午前１０時～、１１時～、午後１時～、２時～、３時～

■ところ　三木市中央地域包括支援センター西部サブセンター
三木市加佐６２－１（旧市民病院管理棟２階）

■内　容　対話形式の記憶力チェック（２０分程度）、健康相談　等

■対　象　物忘れが気になる三木市民の方

■定　員　各時間　１人（予約制）

■スタッフ　保健師、看護師、認知症地域支援推進員　等

■申込方法　電話で西部サブセンターまでお願いします!!

■問合せ先　電話番号：０７９４－８３－０１６０（松本・内海）

頭の健康チェックに来られたご夫婦に話しを聴いた。

奥様は４年前にアルツハイマー型認知症と診断。

介護サービスはまったく受けていない
の。ただで楽しめるところ、いろいろ
行ってるの。他にどこかあるかな？

- **地域の活動に積極的に参加されている。**

  「家にじっとはしてないよ」　→　<u>地域とのつながりが！</u>

- **「ただで楽しめるところ、他にある？」**

  →　<u>みんな知りたい情報じゃない？</u>

ご本人の声を聴く

お父さんは私が何回同じことを言っても怒らないの。だから安心して何でも何度でも言える。

- **認知症の人がどのように感じるのか、どのような言葉かけなら安心できるのか。**

  →<u>ご本人のそのままの言葉をご家族や支援者に伝えたい！</u>

ご本人の声をヒントに　～地域とのつながり探し～

コープ志染店２階にある、地域の方が自由に利用できるスペース。買い物帰りにふらりと寄ったり、囲碁を楽しむ男性も多い。

お父さんは囲碁、その間わたしはお茶を飲んで待ってるの。

店長の提案で、認知症サポーター養成講座を開催。店員さんたちが、寸劇に挑戦。「お客様も、店員さんも一緒に考え、学ぶことができた」と店長。

ご本人の声をヒントに　～地域とのつながり探し～

地域の高齢者が主体となって、健康維持のための体操に取り組む。決まった日時に集まって行う。

みっきぃ☆いきいき体操を続けてるの。

年齢を重ね、家から出にくくなったり、参加の日時や準備の手順がわかりにくくなっても、仲間がフォローしている。
体操グループからの相談があれば、地域包括支援センターが対応について相談支援を行うこともある。

ご本人の声をヒントに　～情報や思いを広く発信する～

- 地域の活動に積極的に参加されている。
  「家にじっとはしてないよ」　→　地域とのつながりが！
- 「ただで楽しめるところ、他にある？」→　みんな知りたい情報じゃない？
- 認知症の人がどのように感じるのか、どのような言葉かけなら安心できるのか。
  →ご本人のそのままの言葉をご家族や支援者に伝えたい！

ご本人の暮らしの工夫や活動、地域とのつながりや思いを載せた「認知症の本人の声を届けるノート（案）」の発行

- 現在作成しているケアパスは状況に応じた標準的な支援の流れは示しているものの、ご本人の視点が不足している。
- ケアパスの補完的な位置づけで発行。
- 同じ認知症が疑われる方やその家族、支援者に向けて発信

ポイント　→地元のいろんな人に協力をしてもらう！

できることから少しずつ・・・

認知症の人の思いを考える

【認知症ライフサポート研修】
医師、歯科医師、介護支援専門員などの多職種が認知症ケアについて学ぶ研修。
三木市は**第５回目**を終えました。**次は・・・**

認知症ご本人、家族、専門職、地域住民・・・

みんなで一緒に「認知症の人の思い」に向き合おう！

認知症の人の思いを地域まるごとで考える

「認知症の方の声を聴いていますか」

ご本人が感じている思いに向き合い、考える研修

対象は　**誰でも**

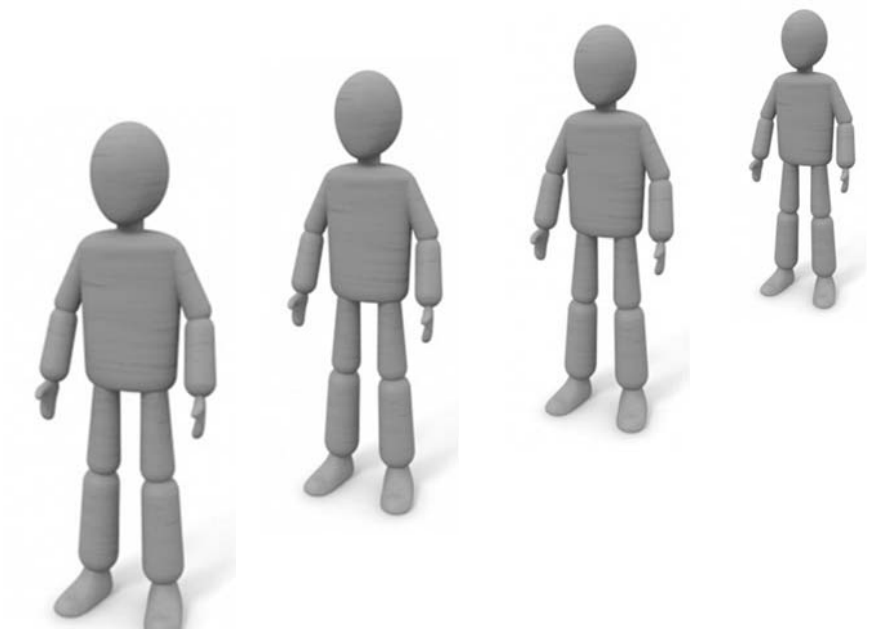
医師や歯科医師、薬剤師、介護支援専門員、訪問看護、
訪問介護、病院相談員、カフェ運営者、**地域住民**・・・

多職種や専門職を越えて、

「地域」まるごと　本気で認知症の方の思いを

考えていこう

もっと多くの人の声を聴くことはできないだろうか



悩

もっと多くの人の声を聴くことはできないだろうか

ヒントは、他県や他市の取り組みの中に！

他の自治体で取り組まれている「心の声アンケート」

三木市でも、取り組みやすい内容！
ケアマネさんに相談してみよう！

【来年度に向けて取り組んでいること】
・心の声アンケートの実施について、
ケアマネ連絡会で伝えた。

ポイント

◆ 認知症施策推進大綱を用いて、「認知症の人やその家族の意見を踏まえて、立案及び推進すること」が前提となっていることを説明
◆ ケアマネジャーに聞き取りを行ってもらい、その声を軸に施策を考えていくことを説明

自分たちの地域で、取り組めることからコツコツと・・・

- 大規模なことではなくても、ポロリとこぼした一言を丁寧に聴くことから初めてもいい。
- すでにある仕組みや、つながりを基本に考える。
- 取り組みやすそうなことがあれば、真似をする。
- 地元の人の協力を得る。

令和元年度　認知症の本人の意見と能力を活かした生活継続のための
認知症施策の総合的な展開に関する調査研究事業報告会

小野 地域と福祉をつなぐ会活動

～地域と連携した取り組み～

さわらびの郷　綿谷 宏【報告者】
小野市地域包括支援センター　大橋 節代

小野市の状況

総人口	48，486人
高齢化率	28%
面　積	93，84㎢

【令和元年12月末現在】

小野　地域と福祉をつなぐ会

構　成	介護保険サービス事業所の有志 市内10ヶ所　約20名 （地域密着型サービス事業所・介護保険施設 通所サービス事業所・有料老人ホーム・福祉用具事業者 地域包括支援センター等）
補助金	北播磨地域づくり活動応援事業助成金
連絡会	約月1回

小野　地域と福祉をつなぐ会

★小学校の見守り隊(毎週水曜日)

施設の仲間と週1回の児童見守り

認知症男性 戻った笑顔

認知症を患う小野市市場町の伊藤春雄さん(79)ら高齢の男女3人が10月から、市場小学校（同市市場町）で毎週水曜日、下校する児童に声をかける活動を続けている。子どもたちも触れ合うことで、伊藤さんらに笑顔が増えており、児童らも顔を合わせるのを楽しみにしているという。（竹内文郎）

小野の介護支援事業所「外に出たい」に寄り添い

緑のキャップとジャンパーを着て、児童見守り隊にとっての目標をさとす、手前から、伊藤春雄さん、津崎久一さん、芝本佐子さん＝市場小学校

3人は小規模多機能型居宅介護支援事業所「まわりの郷」（同市西本町）の利用者。伊藤さんは、津崎さん（94）＝同市恵比井町＝と芝本佐子さん（86）＝同市大島町＝と「見守り隊」を結成し、市場小に向いている。

介護主任浜中かすみさん（46）によると、伊藤さんは2年前の入所以来、勝手に外出することがたびたびあった。「家に帰るんやったら、んさここにおらなあかんか」や「しめ出の気ずかい」が、地元の保育所のクリスマス会に招かれたときは子どもたちと楽しそうに話し、笑顔をかりまいていたという。

市場小校区では以前から地域住民が見守り活動を

当事者は背筋を伸ばして
「気をつけて帰ってね！」

子どもや達から
「元気やった？」

★小学校の見守り隊　子どもとの心の交流

小学生からのお手紙

卒業前に小学生から
プレゼント

★認知症関係『ケアニン』の映画会（北播磨）
当事者含めたパネルディスカッション

加藤さん、曽根勝さん、下薗さん

当事者として地域の活動を発表

91歳ハーモニカを披露

★各地域の夏祭りに参加

新聞記事で地域に発信

2019年(令和元年)8月1日 木曜日

認知症施設が屋台出店

利用者も店番、住民と交流

小野・住吉神社夏祭り

小野市乗井町の住吉神社

★陣屋まつりに参加（主催：地域づくり協議会　商店街活性化）

舞台出演

布を巻いておしゃれに

フリーマーケットのレジ係

どれどれ、商品の売れ行きは？

今年度新規の取り組み①

「人生手帳を通じて高校生と利用者様との信頼関係を築き、認知症の本人の意見と能力を活かした生活継続の支援につなげる試み」

【資料提供及び協力者】

小野工業高校生活創造科福祉コースの生徒7名・担当教諭1名

実習期間（令和元年9月27日～令和2年1月10日）

人生手帳（小野市発行）

小規模多機能型居宅介護事業所さわらびの郷　ご利用者様7名

高校の先生からのご相談から・・・

2015年より交流のあった

小野工業高校生活創造科の先生

今年度の３年生の研究発表として、利用者様と一緒にできる題材はありませんか？

二つの目標達成のために！

①常日頃より高校生と交流のあったさわらびの郷であったが、生徒と利用者様との関係性がもう少し深まればと、かねてより考えていた。

②日々の生活において、認知症状のある利用者様の意見や能力を活かした生活の支援が出来ないだろうか？

☆職員の中にも、これら二つの課題について、このままでよいのだろうかとのいう声があった。

【人生手帳】とは？

～元気なうちからこれからの生き方を考える～

65歳以上の方を対象に元気なうちからこれからの過ごし方を考え、自ら介護予防に取り組み、地域と交流を持って生きて行くことにより、安心した人生を送る事ができる。また、自分の終末期をどのように迎えることが出来るかを親族と話し合うことで、自分らしい人生を過ごすことができる事を目的とした小野市独自の手帳。

※配布場所：小野市総合福祉センター窓口

「5か月間、信頼関係を築いて作成した人生手帳をもとに研究発表が開かれました。」

「昔 輝いていた頃の写真」

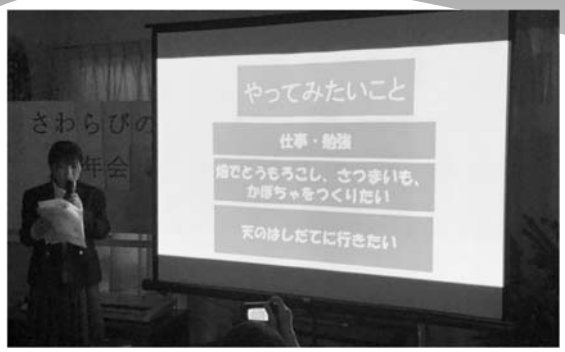
「結果、新しい発見がありました」

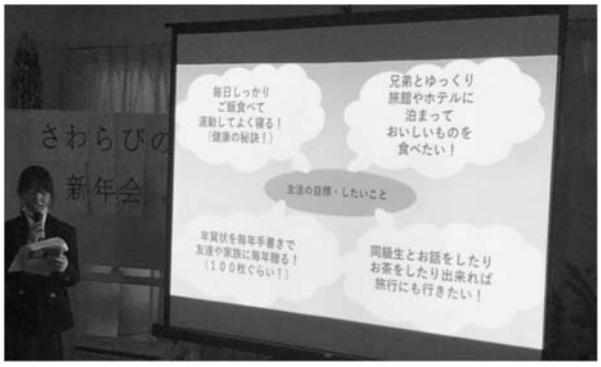
【その一】
一人の高校生と一人の利用者様が
2人一組となる事で、今までの団体と団体
の交流の時よりも、互いにより心を許し
合い、色々な事を話し合える親しい
関係性の構築ができるようになった。

「結果、新しい発見がありました」

【その二】
利用者様も私達福祉の専門職の様に、認知症状
、介護度から入る関係性ではなく、　先入観なし
に、一人の人としての関わりを生徒一人一人が
大切にして下さった結果、今まで専門職からの問
い掛けではなかなかお答えが返ってこなかった「
これからしたいこと」や「叶えたい夢」のことをお話
下さるようになった。

「これからやってみたい事」





「これから叶えたい「夢」」

「人生手帳を手に生徒と利用者様で」

今年度新規の取り組み②

「本人のこころの声アンケートを実施」

【目的】
本人の意見を活かしたケアプラン作成及び地域づくりを推進していくため

【調査期間】令和元年9～10月

【調査対象者】認知症又は軽度認知機能の低下のある方　43人

【調査方法】

①介護支援専門員により本人からの聞き取り調査

②介護支援専門員（26人）へ聞き取り調査後のアンケートを実施

「本人様のご意見」

✿嬉しい時

・手伝いを頼まれたり、ありがとうと言ってもらえた時

・季節の花が咲いた時　など

✿地域へのお願いや伝えたいこと

・自分は上手く話せないけど、自分の周りの人だけで決めないでほしい

・認知症になったらあかんとか、終わりやねと言わないでほしい。終わりとちがう。　など

「介護支援専門員の意見」今後の活用

✿ご本人の声を聞いて気づかれたこと

・ご本人のできることをなくさない支援を行っていきたい

・周囲に迷惑をかけないように気遣った結果、引きこもりになり機能低下したことがわかった　など

✿ケアプランに活かせそうなこと

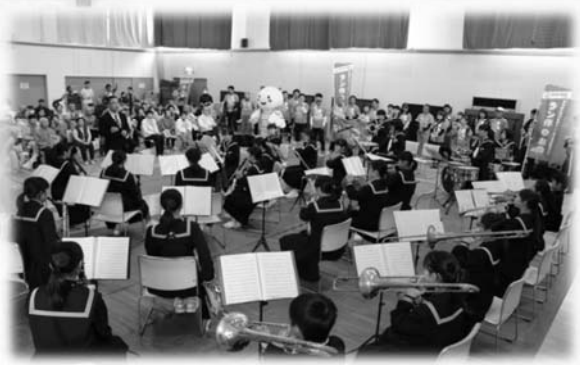
・アセスメントがきちんとできていると、ヒントを投げかけると自分の気持ちに気づかれる

・趣味や活動などやりたい事を目標として、リハビリメニューを再検討したい　など

→ ●介護保険事業計画策定に反映
●認知症ケアパスの改訂時に当事者や介護者の意見を反映する

★ラン伴in2019おの【R1年11月3日】

★ラン伴in2019おの【R1年11月3日】



YouTube

配信中 『ラン伴　小野』で
検索してください。

これからも、ご本人の思いを聴かせていただき、
本人に寄り添い、地域で一緒に暮らせるよう
サポートしていきたい…。

認知症の本人の意見と能力を活かした
生活継続のための認知症施策の
総合的な展開に関する調査研究

兵庫県北播磨圏域の取り組み まとめ

1．市町と加東健康事務所の関係

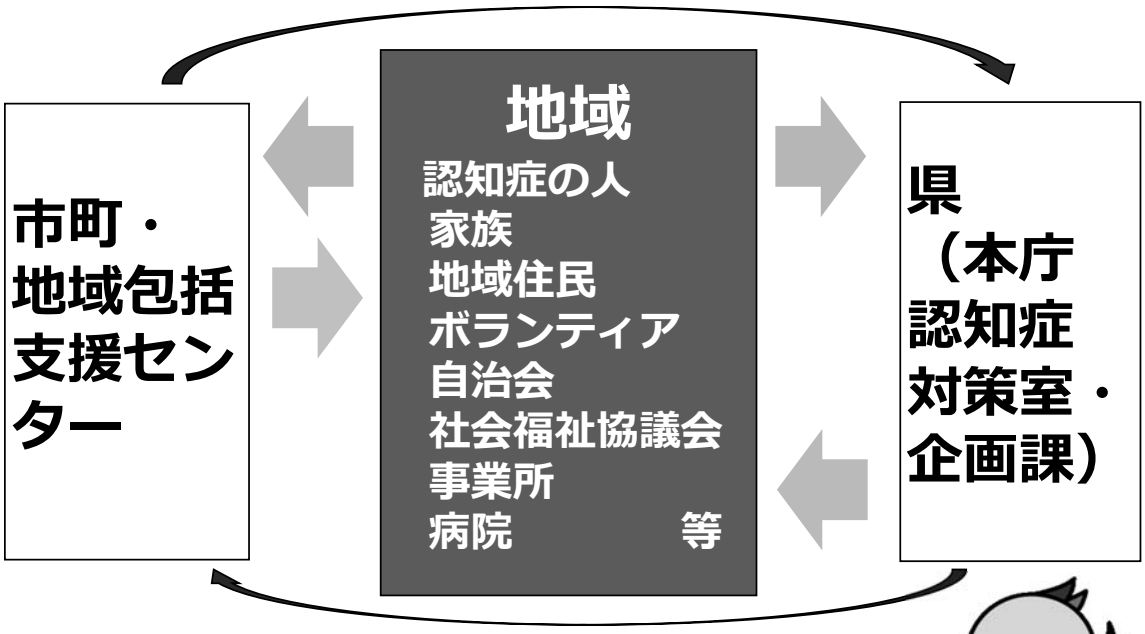
1）認知症関連の定例会議で会う
2）認知症カフェ、地域の事業所/団体の行事で会う
3）県・市主催の行事で会う
4）地域が主体で、市町と県は、寄り添うという価値観が一致している
5）新聞記事をみて市町の担当者の顔が浮かぶ

顔の見える関係・価値観の共有 → 信頼・自立

→ それぞれが地域と関わる

→ 協働して地域と関わる

２．本老健事業で気づいた認知症に関する北播磨圏域の強み



だれかのサポーターであり、だれもがパートナーである。

ご清聴ありがとうございました。

令和元年度老人保健事業推進費補助金(老人保健健康増進等事業分)
「認知症の本人の意見と能力を活かした生活継続のための
認知症施策の総合的な展開に関する調査研究事業」

事業報告会

(令和2年2月22日)

香川県　三豊市立西香川病院
認知症疾患医療センター
[三豊市・観音寺市の方々とともに]

1

三豊市立西香川病院　紹介

認知症疾患医療センター(三豊市・観音寺市)

2

三豊市立西香川病院　紹介

病院理念：「高齢者にやさしい病院」

高齢者に対する慢性期の医療や介護，リハビリテーションに重点を置いている

・入院総数150床

（精神療養病棟60床：認知症専用

介護療養型医療施設30床，回復期リハビリテーション病棟60床）

・重度認知症患者デイケアを併設

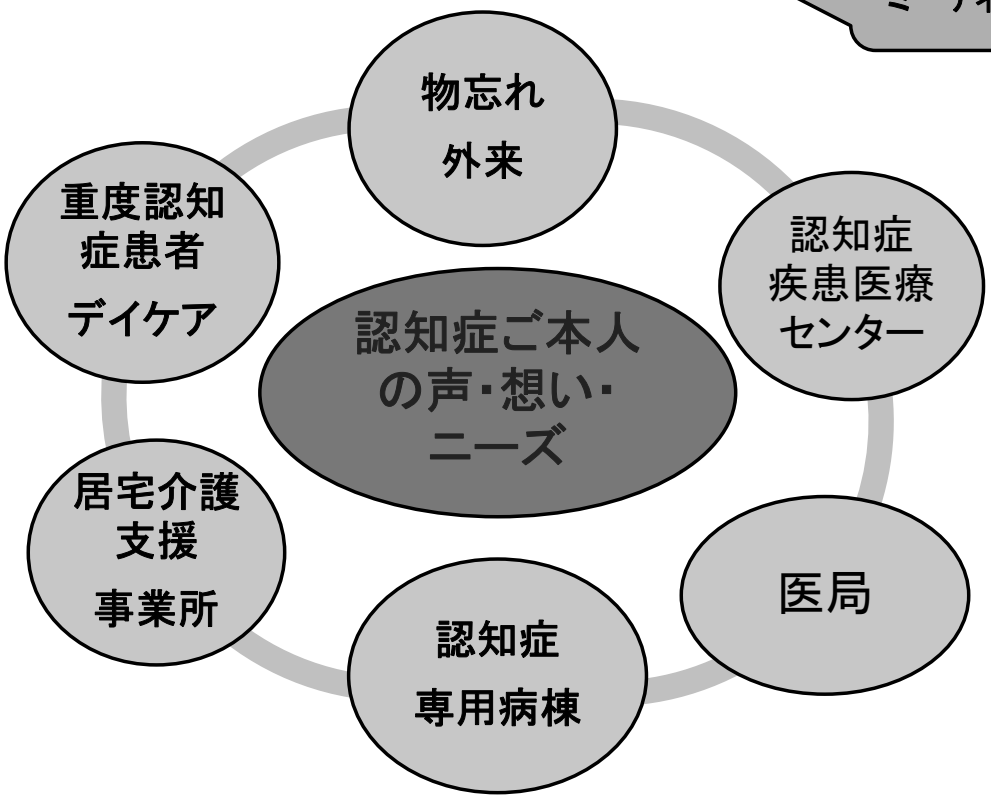
・物忘れ外来、認知症疾患医療センター

・居宅介護支援事業所、通所リハビリ、小規模デイサービス

3

認知症部門連携

週1回
ミーティング



4

2019年度　病院目標

- 超高齢社会を迎え
  誰もが安心して暮らせるよう
  住民と共に地域づくりを進め
  地域の互助力を高めよう

- 当事者本人の声を聴き
  本人一人ひとりの心情・心理と
  全人的な4つの痛みを理解し
  本人とともに感じ考え前へ進もう

5

認知症の人への初期支援

- 早期診断・早期絶望にならないように
- 診断、薬物療法だけでは、認知症の人は
  不安と絶望の状態に陥る。特に、自身の認知症
  観や家族や周囲との関係性に不具合が生じる。

↓

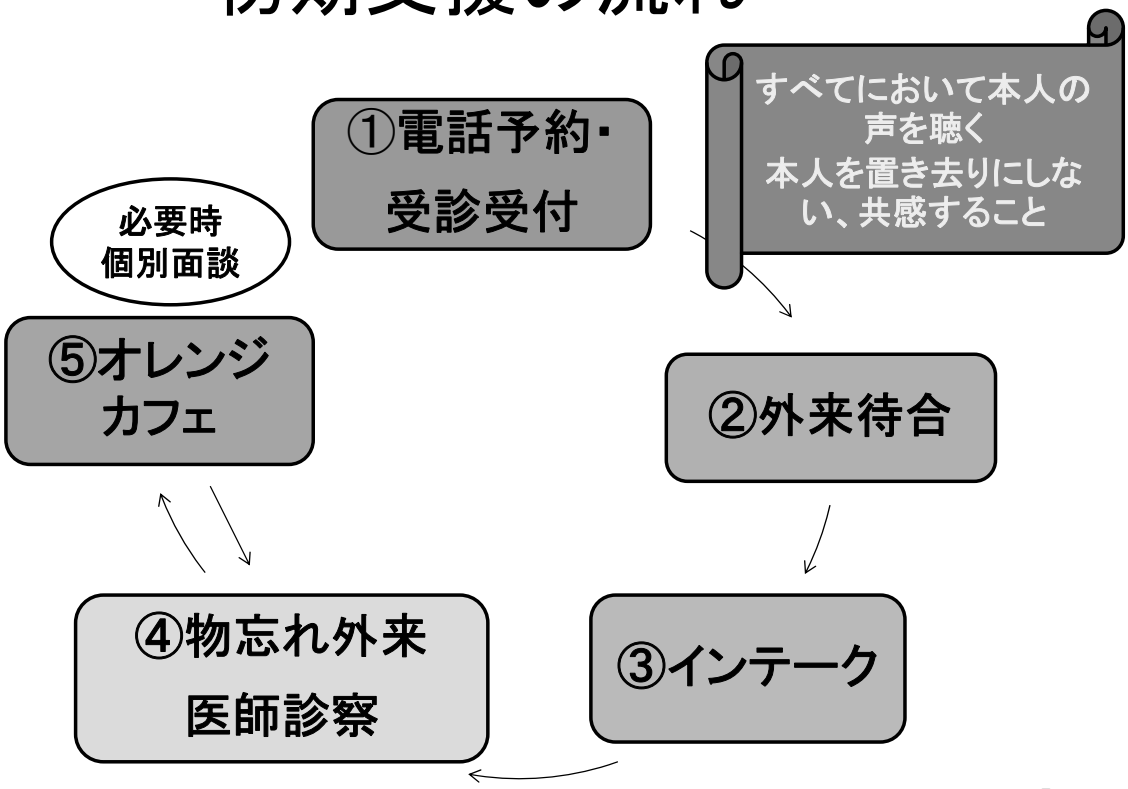
心理的支援

↓

認知症の人が、一般的な悪い認知症
のイメージを変え、認知症とともに自分
らしく生きることを目指す

6

初期支援の流れ



7

診察：本人への心理的支援(初診時から)

- まず、最も重要な信頼関係をつくることに努めながら、本人とその周りの状況を詳しく把握していく
- 心情・心理をできうる限り理解し、不安などの軽減を図る
- 悪すぎる認知症のイメージを改善するための説明
- 本人の心情、心理的体験について、
  確かめながら代弁できるところは行う
  本人に語れるところは語ってもらえるよう援助・工夫
- 悪い部分ばかり見てしまう狭くなった視野を広げ
  自己像を修復できるよう援助しつつ、
  自身の状況への受容へ（強いずに「待つ」を前提に）
- 楽しみ、生きがいの再発見など人生再構築の援助

8

診断後支援におけるピアカウンセリング

- 当院では主に、診断後早い時期に院内にあるオレンジカフェにて、認知症当事者の相談員雇用という形を用いて、ピアカウンセリングを施行
- 物忘れ外来で医師が、認知症のイメージの悪さ、誤解についても説明し、できるだけ疾病観を改善しておいてから、オレンジカフェを紹介
- 前もって本人の情報を相談員に伝えて準備
- 当日振り返り、月１回のカンファで意見交換
- 相談員の関わりで、心の内面の表出ハードル低下
  →状況把握や支援のヒントにも（本人の語り、表情・態度から）

9

西香川病院のオレンジカフェ(認知症カフェ)

・認知症当事者が相談員として勤務している
・ピアサポートを中心に

- 病院の敷地内にある官舎の一室を利用
- 週1回　金曜日　10:00～15:00
- 利用料：無料
- 利用者：西香川病院に通院している認知症当事者やその家族
- 利用人数：１日約20人程度（認知症当事者や家族）

10

西香川病院　オレンジカフェ

11

診断後支援における
ピアサポートの意義と位置づけ

- （特に初めのうちは）相談者は支援者に対し“どうせ分かってはくれないだろう”と思っている。
- 当事者からの勇気づけは本当の勇気づけになりうるが、一方、支援者の勇気づけは“安易な気休め”になりかねない。当事者でないと分かり得ないところがある。
- 当事者の体験などを聴き、自分だけではないと感じることができ、孤独感、不安を軽減し、連帯感、安心感をもてるようになる。
- 相談員（渡邊さん）の自分らしく生きる姿に希望をもらえ、前向きな生き方への転換の援助が期待できる。

ピアカウンセリングを通して

- 相談員（渡邊さん）の体験や思いを聴き、また相談者（認知症当事者）自らも発言をしながら、互いに共感しつつ、相談者は自分の状況に折り合いをつけていっている。
- 出来ること出来ないことを整理、納得しながら、これからの過ごし方や考え方・捉え方について、当事者同士が相談したり語り合ったりする中で、考えたり学んだりしている。
- 「認知症とともに自分らしく生きる」ために、相談者にとって貴重な体験となっている。

認知症とともに自分らしく生きようと変化

- 家に引きこもっていた方が、オレンジカフェの前日にお風呂に入り、当日は、朝シャンをしてきちんと身支度して来られるようになった。オレンジカフェでは歌を披露されるまでに。
- 会社の社長さん、仕事ができなくなっていたが、職員とともに挨拶まわりに出かけられるようになり、「よろしくお願いします」と伝えながら仕事をされるように。
- 何も手に付かなかった方が、夫の地域での活動に、共に参加されるようになり、少しづつ家事もできるように。

三豊市立西香川病院(認知症疾患医療センター)
三豊市・観音寺市の方々とともに

取り組んだ主な内容

1. 三豊市・観音寺市地区の認知症を学び支える会にて「当事者の声を聴き、感じ、考えよう」
2. 三豊市の方とともに
3. 観音寺市の方とともに

15

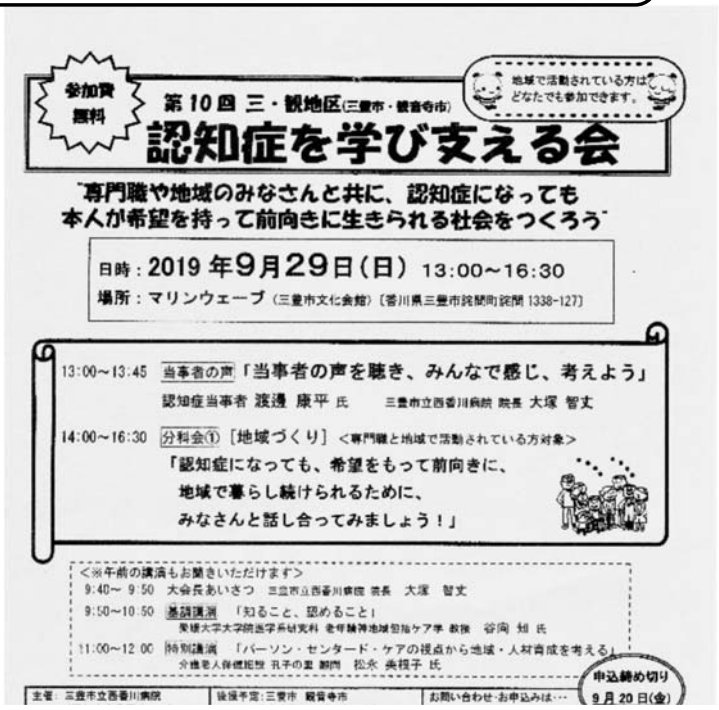
1. 三豊市・観音寺市地区　認知症を学び支える会

この会を平成21年度より実施しており、今年度は、「当事者の講演と、声を聴くだけではなくディスカッションを行った。

実行委員
- 三豊市・観音寺市包括支援センター
- 地域の介護サービス事業者
- 西香川病院

参加者
- 当事者、当事者家族
- 医療・福祉専門職
- 行政
- ボランティア、学生
- 認知症サポーター養成講座受講者
- 民生委員、自治会長
- 町づくり推進隊
- オレンジカフェ運営者

など


参加費無料

地域で活動されている方はどなたでも参加できます。

第10回 三・観地区(三豊市・観音寺市)

認知症を学び支える会

"専門職や地域のみなさんと共に、認知症になっても本人が希望を持って前向きに生きられる社会をつくろう"

日時：2019年9月29日(日) 13:00～16:30
場所：マリンウェーブ(三豊市文化会館)〔香川県三豊市詫間町詫間 1338-127〕

13:00～13:45 当事者の声「当事者の声を聴き、みんなで感じ、考えよう」
認知症当事者 渡邊 康平 氏　三豊市立西香川病院 院長 大塚 智丈

14:00～16:30 分科会① [地域づくり] <専門職と地域で活動されている方対象>
「認知症になっても、希望をもって前向きに、地域で暮らし続けられるために、みなさんと話し合ってみましょう！」

<※午前の講演もお聞きいただけます>
9:40～9:50 大会長あいさつ　三豊市立西香川病院 院長 大塚 智丈
9:50～10:50 基調講演「知ること、認めること」
愛媛大学大学院医学系研究科 老年精神地域包括ケア学 教授 谷岡 哲 氏
11:00～12:00 特別講演「パーソン・センタード・ケアの視点から地域・人材育成を考える」
介護老人保健施設 孔子の里 顧問 松永 美穂子 氏

申込締め切り 9月20日(金)

主催：三豊市立西香川病院　後援予定：三豊市 観音寺市　お問い合わせ・お申込みは…

1. 三豊市・観音寺市地区　認知症を学び支える会

令和元年9月29日　三豊市　マリンウエーブ

- 三豊市・観音寺市の専門職や地域住民、学生さんなど約170名参加

・三豊市・観音寺市地域包括支援センターの方とともに企画・運営

17

参加者のアンケートから

- 実際に当事者の声を聞かせていただき、本人が苦悩している部分にふれさせていただきました。
- 改めて当事者の声を聞く機会をいただき、考えられた。サービスや支援の方向性に目を向けがちであったが、本人の想いにしっかり寄り添うこと、改めて気をつけたいと思います。
- 当事者の方の話を聞き、認知症の方の過ごしやすい社会を作るのは、私たち自身で、過ごしにくい社会を作るのも私たちなのだと感じた。
- 認知症は当事者同士にしかわからないことがあり、認知症になってもできることはたくさんあり、それを引き出していくことの大切さを感じた。
- ご本人からの言葉には本当の思いや戸惑い等を感じました。認知症になっても希望を持てます。
- 認知症だというと、周囲の人は「扱いにくい」「関わりたくない」など否定的になったり、関係性が変化したりするが、私たちと同じく、ひとりの人間として生きているということを改めて知ることができた。

18

分科会：認知症になっても希望をもって前向きに、
地域で暮らし続けられるために、
みなさんと話し合ってみましょう！

住民(活動されている方)・専門職・行政
ご本人や家族

グループにご本人も参加

参加者の声

- 本人の声・想いをさらに分科会で伺うことができ、また、環境・家族・周囲の関わりや理解が、本人の支援に大きくつながるということを深く感じました。
- まと外れになっていないか？本人のインタビューを、社会の意見を聞いて考えていく必要がある。
- 認知症をオープンにしていくことは、いいことだし、助けてもらえる。どう思われるか不安な部分がある。
- 時代がかわってきているので、認知症をオープンにしやすくなっている。
- 一人暮らしの方が増えている、高齢者が高齢者を支える時代になってきている。「こんにちは」と一声かけるということを地域内で広げていきたい。
- 認知症の人を知ることが大切。
- 本人にとって安心できる地域の場がもっと必要である。

2. 三豊市の方とともに（地域包括支援センター）

- 令和元年8月9日
  「三豊市オレンジカフェ主催者交流会」
  ご本人の声を聴いて活かそう！

現状として、三豊市の中に、7つのオレンジカフェが立ち上がったが、高齢者サロンに近いものや認知症当事者が集まらないなど課題がある。

三豊市地域包括支援センターはオレンジカフェ主催者へ、より、認知症当事者や家族のためになるオレンジカフェを目指していただきたい。

23

2. 三豊市の方とともに（地域包括支援センター）
①「三豊市オレンジカフェ主催者交流会」

渡邊さん(認知症当事者)より

・自分の認知症になって奈落の底に落ちたような体験から、自分がオレンジカフェで、さまざまな当事者や家族とかかわり、前を向いて生きようとされる姿をみて嬉しい。それが自分の生きがいである。
・来られている人(当事者や家族)のことをその人の立場になって、気持ちを知ってほしい、理解してほしい。
・真剣に取り組んでほしい。
(向き合ってほしい)
など

参加者(オレンジカフェ主催者)より

・来られている人(本人や家族)の声をできるだけ聴き、目的ややり方を考え直そう。
・認知症について勉強しよう。
など

24

２．三豊市の方とともに（地域包括支援センター）

②「物忘れが気になる人と家族の集い」

令和２年２月１４日

※地域の交流センターで、西香川病院関係の当事者さんと家族で参加

当事者

・家族が、自分の想いを十分かってくれない辛さがある。
・認知症だけではなく、身体も不具合が出ている。認知症も体も、仕方ないと割り切って、できること、楽しめることをやっていこう。

ご家族

・本人のために、家族として努力していることを、他の家族がよく頑張っているとねぎらい、認め合うことで、「話が出来て良かった、ここへ来てよかった」

25

３．観音寺市の方とともに（地域包括支援センター）

①「おれんじの会」

認知症サポーター養成講座受講後の活動の場で、認知症啓発グループに渡邊さん(認知症当事者)が入り認知症を学びなおす(正しく理解する方法などの話し合いを行っている)

②令和元年12月より、包括が主催する(西香川病院もお手伝い)本人ミーティングを月1回でスタート。キャラバンメイトさんも参加。

26

３．観音寺市の方とともに（地域包括支援センター）
③認知症シンポジウム　認知症とともに自分らしく生きる

令和元年12月12日

藤田和子さんと渡邊康平さん

３．観音寺市の方とともに（地域包括支援センター）
③認知症シンポジウム　認知症とともに自分らしく生きる
参加者アンケートより→認知症のイメージが変わった

- 誰にとって居心地がよいのか。本人にとってどうなのか。信頼関係を築くことの大切さと、分かったつもりにならないように気をつけて行動したい。
- 一歩一歩、まだまだだけど前に向いて進んでいきたい。正しく理解するために差別なく付き合う大切さを学んだ。
- 本人の意思を尊重し、共に生きることを伝えられる地域になる必要を感じた。
- 本人の声をよく聴くことの大切さがわかった。
- 認知症の方と一緒に考えていくことが大切だと感じた。
- 認知症になっても前向きに、生きていけそうと強く思い、勇気がわいてきた。
- 隠すことではなく、恥ずかしいことではないと思った。
- 認知症を自分のこととして考える機会になった。

など

取り組みを通して

- 認知症当事者の声を聴くことで、声の重要性や気づき、支援や活動の再確認やモチベーションにも繋がる。
- 当事者が自分らしく暮らす姿(声)を通して、地域の認知症観の変化へ
- 仲間同士が、同じ目的や価値観を持って活動できる。
- 認知症当事者(家族)と支援者の関係が、支え支えられるだけでなく、共に生きる存在として捉えられる。

→認知症になっても自分らしく暮らし続けられる地域づくりへ

29

令和元年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）
認知症の本人の意見と能力を活かした生活継続のための
認知症施策の総合的な展開に関する調査研究事業

大崎市の取り組み
～こころの声から見直す地域づくり～

大崎市民生部高齢介護課高齢福祉係　岡崎　ひかり
志田地域包括支援センター　髙橋　さえ子

大崎市が取り組んだ内容

1．本人の声を聞くためには･･･
　認知症の人と家族の実態把握調査
　「こころの声アンケート」の実施

2．本人の声を活かすには･･･
　認知症ケアパスの見直し

大崎市の紹介

- 大崎市は宮城県の北西部に位置する。
- 東西に約80㎞，面積は796.76㎢
- 大崎市は平成18年3月31日，古川市・松山町・三本木町・鹿島台町・岩出山町・鳴子町・田尻町の１市６町が合併した市である。
- 日常生活圏域は上記の旧１市６町の区域を圏域の基礎とし，古川地域を中学校区を基本とした5つの区域にわけた，11圏域としている
- 各圏域は，それぞれ地理的条件や人口，交通事情などその他の社会的条件が異なる

	平成31年4月1日現在
総人口	130,158人
高齢者人口	38,253人
高齢化率	29.4%
世帯数	51,332世帯
介護認定者数	7,586人
要介護認定者率	19.8%
認知症高齢者数 （介護保険主治医意見書Ⅱ以上）	4,638人
地域包括支援センター数	4カ所
認知症地域支援推進員数	16人（行政1人，包括15人）
日常生活圏域数	11圏域

日常生活圏（中学校区単位）ごとの状況

平成31年4月1日現在

日常生活圏域別	圏域別人口（人）	高齢者人口（人）	高齢化率（％）	要介護認定者数（人）	認定率（％）	認知症患者数	認定者割合（％）	
古川	22,556	5,053	22.4%	885	17.5%	507	57.3%	古川包括支援センター
古川東	22,093	4,700	21.3%	858	18.3%	483	56.3%	
古川西	7,049	2,694	38.2%	554	20.6%	346	62.5%	
古川南	16,341	2,998	18.3%	469	15.6%	271	57.8%	
古川北	9,291	3,118	33.6%	621	19.9%	364	58.6%	田尻包括支援センター
田尻	10,750	3,865	36.0%	846	21.9%	518	61.2%	
三本木	7,785	2,449	31.5%	428	17.5%	280	65.4%	志田包括支援センター
松山	5,957	2,093	35.1%	406	19.4%	203	50.0%	
鹿島台	11,789	4,137	35.1%	857	20.7%	550	64.2%	
岩出山	10,605	4,393	41.4%	1,022	23.3%	708	69.3%	玉造包括支援センター
鳴子	5,942	2,753	46.3%	640	23.2%	408	63.8%	
市内計	**130,158**	**38,253**	**29.4%**	**7,586**	**19.8%**	**4,638**	**61.1%**	
市外（住所地特例者）	194	194		179	92.3%	150	83.8%	
市資格者総計	**130,352**	**38,447**		**7,765**	**20.2%**	**4,788**	**61.7%**	
第2号被保険者		232		184		81	44.0%	
計		***38,679***		***7,949***	***20.6%***	***4,869***	***61.3%***	

※認知症高齢者数：介護保険主治医意見書により認知症高齢者自立度がⅡa以上の人数

※高齢者人口については他市町村からの施設入所者(住所地特例）を除いた数

5

認知症の人と家族の「こころの声」から事業展開

1．本人の声を聞くために取り組んだこと

認知症の人と家族の実態把握調査「こころの声アンケート」実施
～大崎市の認知症施策の経過～

H24・H29実施

■平成18年　1市6町村が合併し，大崎市誕生

旧市町でそれぞれ異なった保健活動の歴史。
認知症施策の方向性や取り組む事業も異なる。（地域性の違い）

■平成21年度　市の認知症施策の長期目標を決定

≪いつまでもいきいきと，認知症になっても安心して暮らせる大崎市≫

・　認知症実態把握調査事業の実施
目的；市内全体の認知症の傾向を調査
一部モデル地域に実施（200名希望者，CDR,MRIの実施）

■平成22年度～

認知症についての啓発を強化　（認知症サポーター養成講座の実施）
→認知症施策の方向性を『地域づくり』を主とする

■平成23年3月11日　東日本大震災発生

認知症高齢者の支援が大きな課題に
⇒認知症施策を重点事業として取組み開始，認知症施策を体系化

連携し活動推進するために，認知症地域支援推進員を行政，地域包括支援センターに複数配置

認知症の人と家族の実態把握調査「こころの声アンケート」(H24)

◆取り組みのきっかけ

初めは「どのような活動をしよう・・・？」と思った

本人・家族の声を聴いたことがないよね。気持ちを聞いてみたい！という話に。

こころの声アンケート実施へ

◆協働のメンバー

認知症地域支援推進員・介護支援専門員

なぜ介護支援専門員と協働・・・？
・認知症地域支援推進員だけでは，認知症に対する相談や取り組みはまわり切らない
・1番困っているのは家族，次に困っているのは介護支援専門員ではないか
→介護支援専門員と一緒にアンケートを実施しようと考えた

こころの声アンケートを実施して思ったこと（H24）

本人って自分の気持ちを言えるのかな？

実施してみて

本人がこんなこと言えるんだ！

さらに

介護支援専門員同士がつながるきっかけになり，
その後の活動の基盤になった

アンケートを分析し事業化へ。認知症ケアパスの作成。

2回目のこころの声アンケート実施（H29）

1回目のアンケートから5年が経過し、地域のニーズが変わってきていることを感じた。さらに，自分たちの活動の評価もしたい。

実施してみて

- 地域で認知症に対する偏見が少なくなってきている
- 温かい目で見守っている人たちが増えてきている
- 聞き取りの中で無言が少なくなった
- 前より介護支援専門員がいろいろな気持ちを聞き取れるようになった！

本人を中心とした活動に変わってきていることを実感
本人・家族が1人じゃないと思える地域に近づいている！

こころの声アンケートの結果を周知していたらこんな声が…

地域の声「居心地の良い地域の居場所って？」

- 近所で助け合える地域
- 分かり合える友達がいる場所
- 趣味や楽しみがあるといい
- 家が楽
- 大崎市の活動を初めて知った
- 認知症ケアパスを知らなかった

医師の声

- なるべく本人と話すようにしている
- 本人・家族が困っていないケースも
- 地域でのサービスは医師からは説明できないので，ケアマネに頼っている
- 困っていてもそのあとのフォローがなかなかできない
- 今日の説明を聞いて包括につなげばよいということを知った
- 診察していて集いの場を勧めてい時があるが，どこでやっているのかわからない

こころの声アンケートの結果を様々な場面でお伝えしていく中で見えてきたこと

- そもそも大崎市の認知症事業を知らなかった！
- 安心して暮らせる場所はなじみの場所だ
- のんびり自分らしくいられる場所
- どこか行く場所があると安心できる

- 大崎市の認知症施策の周知がまだまだ足りない。
- 認知症についての普及啓発を継続して取り組みたい。
- 医療と地域の連携を深め，初期からの支援につなげていきたい。
- 認知症になっても地域で暮らし続けられるよう，地域での居場所，相談の場を増やしたい。

認知症ケアパスを見直そう！

12

認知症の人と家族の「こころの声」から事業展開

２．本人の声を活かすには･･･
～認知症ケアパスの見直しへ～

認知症ケアパス作成メンバー

・認知症ケアパス検討会 ･･･

具体的に内容検討

【メンバー】
認知症地域支援推進員
行政：３人・包括支援センター：それぞれ1～2人（代表）

・認知症対策推進協議会（認知症ケアパス作成委員会）

【メンバー】
大崎市医師会・大崎歯科医師会・大崎薬剤師会・社会福祉法人大崎市社会福祉協議会・大崎市民生委員児童委員協議会・宮城県北部保健福祉事務所・宮城県ケアマネジャー協会大崎支部・宮城県認知症グループホーム協議会・社会福祉法人永楽会・認知症高齢者を抱える家族・大崎市行政区長協議会・認知症疾患医療センター

認知症ケアパス作成の流れ①
認知症ケアパス検討会を定期的に開催

日にち	活動・会議	内容
令和元年 7月	第1回 認知症ケアパス検討会	・認知症ケアパス見直し・作成にあたり目的を決定 1. 現行のケアパスの情報の古い部分を修正 2. 新たに，地域住民が認知症ケアパスを見て「認知症になっても大丈夫」と安心できる認知症ケアパスを作成する
令和元年 8月	第2回 認知症ケアパス検討会	・まずは現行のケアパスの修正から始める ・手法の検討 →包括ごと章を担当し，内容を見直す ・こころの声アンケートの活かし方の検討

認知症ケアパス作成の流れ②
第3回認知症ケアパス検討会（令和元年9月）

蓋を開けてみれば・・・

- ◆ **今の情報と合っていない！情報が古い！**
- ◆ **こころの声アンケートをいろんなところに入れたいけどどうしよう・・・**
- ◆ **認知症の進行に合わせた使えるサービスの紹介がわかりづらいね**
- ◆ **そういえばどこを見ていいかわからないって言ってたなぁ**
- ◆ **本人目線の物になっているのだろうか・・・**

初めは電話番号などを変えればいいかなと思っていた現行の認知症ケアパス・・・

改めて見てみたら思ったより見直すことがたくさんあることに気づいた

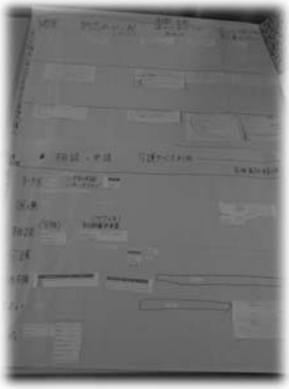
現行のケアパスを丁寧に見直すことに

本人の声を反映した使えるケアパスに！

認知症ケアパス作成の流れ③
認知症ケアパス検討会での検討内容

日にち	活動・会議	内容
令和元年9月	第3回 認知症ケアパス検討会	• 地域包括支援センターごとに担当章の確認 • 現行の認知症ケアパスの変更点を提出 • 内容の精査，検討，突合 • 医師会との調整 • 掲載機関に連絡 • レイアウトの確認
令和元年10月	第4回 認知症ケアパス検討会	
令和元年11月	第5回 認知症ケアパス検討会	

- こころの声アンケートをどのように活かす？
- 大崎市の認知症施策をどのように伝える？
- 新たに追加になったサービスが多くあるね
- 認知症ケアパスのタイトルは何にしよう？
- 認知症の進行に合わせた状態の表現方法はどのようにしよう？



認知症ケアパス作成の流れ④

【令和元年12月9日】

第1回認知症対策推進協議会開催

⇒認知症ケアパス検討会で検討を重ねた新しい認知症ケアパスの案を提案し，意見をいただきました

- 大変わかりやすいので，完成したら病院に置きたい！
- 大崎市の認知症施策が充実していることがわかる
- 認知症予防に口腔ケアについて入れてほしい
- 内容は網羅されているが情報過多ではないか
- 文字が多くて見にくい
- 認知症の人・家族が相談するきっかけになれば
- 相談窓口がたくさんある
- 認知症と言われた初めの段階でこういった冊子に出会いたかった
- 「認知症ケアパス」という言葉を使うのか，使わないのか

認知症ケアパス作成の流れ⑤

【令和元年12月26日】

第6回認知症ケアパス検討会を開催

⇒認知症対策推進協議会で出た意見を踏まえて再度検討し，認知症ケアパス最終案が完成

終わってみたら・・・

- ◆ 古くなった情報の修正だけを行うつもりだった現行の認知症ケアパスを力を入れて見直した。
- ◆ 認知症対策推進協議会で情報過多との意見から，認知症ケアパスの簡易版を作ることに。
- ◆ 認知症ケアパスの情報量が多く，本人の声をより多くの人に伝えるにはどうしたらよいかという新たな課題も。

認知症ケアパスの見直しの方向性を改めて決定

1. 現行のケアパスの見直しを行う，見直したケアパスの簡易版の作成を行う
2. 本人向けにこころの声を発信できる，本人ガイドを作成したい

認知症ケアパス見直しにおいて工夫した点・変更点①

認知症ケアパスのタイトル

「認知症ケアパス」

（案）

こころの声から生まれた

「大崎市版　認知症あんしんガイドブック」

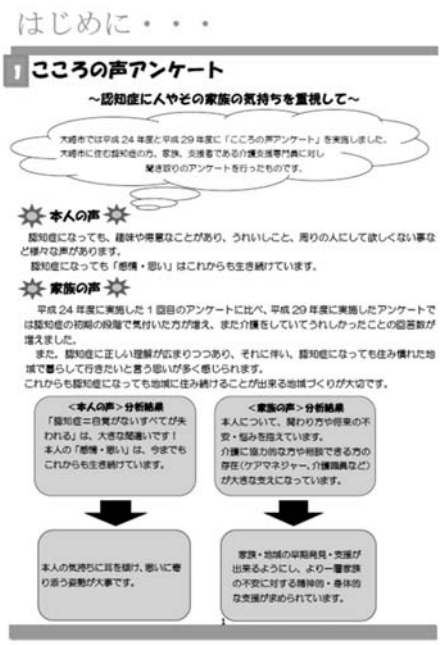
・「認知症ケアパス」という言葉を使うのか？
⇒認知症ケアパスでわかる人もいるので言葉は残したい
・認知症になっても大丈夫と思ってほしい，手に取りやすいタイトル
⇒「認知症あんしんガイドブック」というタイトルに
・「こころの声から生まれた」**⇒私たちの思いが伝わってほしい**

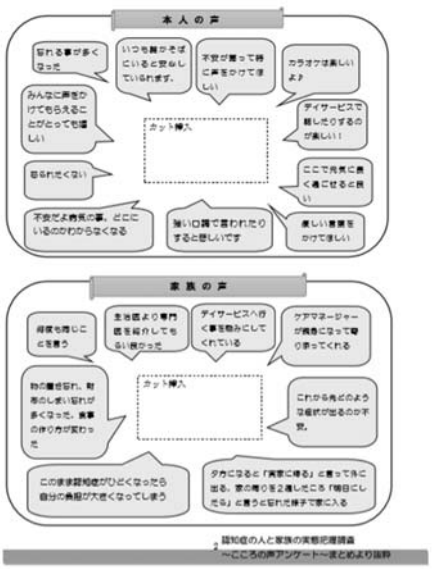
認知症ケアパス見直しにおいて工夫した点・変更点②

本人の声・家族の声の伝え方

本人・家族の声をそのまま伝える

（案）





認知症ケアパス見直しにおいて工夫した点・変更点③

認知症の状態とそれに伴う思い，サービスをひとめで分かるようにした

本人の様子・できることは中期・後期になってくると怖い・・・といった声も
⇒こころの声アンケートで聞いた「趣味や夢」で出た声を記載

具体的なことが書いてあるページを明記し，行動につながるように工夫した

（案）

認知症ケアパス見直しにおいて工夫した点・変更点④

「**本人が気持ちを伝える**」

「**家族が本人のことをもっと知る**」

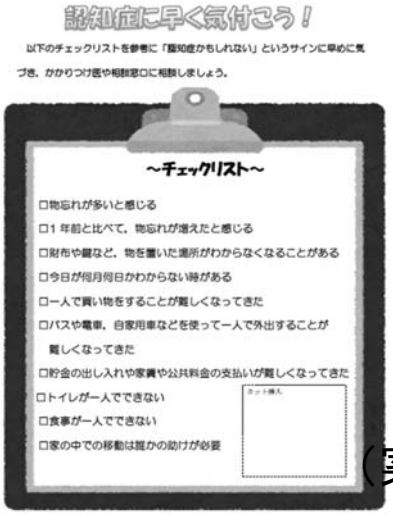
きっかけになるページの作成

認知症ケアパスを読んで終わり。
ではなく，認知症ケアパスを読んだことから
本人や家族が次に進む一歩になってほしい。

本人や家族がまだ知らないことを知るきっ
かけになってほしい。

（案）

認知症ケアパス簡易版について（紹介）



【POINT】

- 相談へのきっかけに
- サイズはA5版（手に取りやすいものを）
- 認知症ケアパスから一番伝えたいところを選んで作成（改めて作ったものはほとんどありません）

（案）

2ページのものを1ページに集約

タイトルは
こころの声から生まれた
「大崎市版認知症ミニあんしんガイドブック」

今後について

- **本人の声をもっと届けたい**
  ⇒本人ガイドの作成へ

- **認知症ケアパスの周知の機会を設け，認知症について，本人の声についてみんなで考える機会を作りたい**
  ⇒認知症セミナーなどの実施
  ⇒さまざまな場を活用しての周知

最後に・・・　この取り組みを通して思うこと

伝えていくことが大事

本人・家族・地域・医療・介護
関わっている人みんながつながり
同じ思いになれるといいな(^^)

ご清聴ありがとうございました

参考資料

認知症の人と家族の実態把握調査「こころの声アンケート」

取組みのきっかけ

- 行政担当者と地域包括支援センターで担当者会議を開催
  ・活動の目標を決定　・既存の事業の見直し　・課題整理

認知症地域支援推進員の目指す姿（中期目標）
認知症の人と家族が　優しい地域の輪の中で　元気に暮らせる大崎市

- 活動を決定する中で大切にした考え方

事業や取組が認知症の人と家族の笑顔につながっているか確認しながら行っていきたい

認知症の人と家族に誰もが優しく温かい声がけができる地域になるといいな

認知症の人と家族が孤立しないで，地域の人達や関係機関みんなが同じ輪の中に入って，つながることができるといいな

⇒

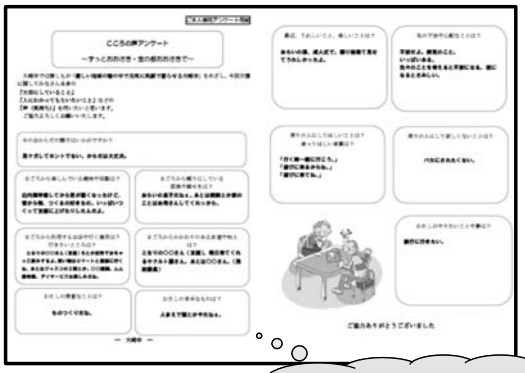
活動を考える大前提として
認知症の人と家族の思いを聞こう！！
⇓
どんな方法？
⇓
認知症の人と家族の実態把握調査「こころの声アンケート」の実施

調査概要

アンケートの目的

- いつまでもいきいきと認知症になっても安心して暮らせる地域づくりを推進するために，**認知症の人と家族の声を聴き**，**地域で暮らしていく上での課題について明らかにする**
- 認知症の人と家族に常日頃関わっている介護支援専門員に調査を依頼し，聞き取りを通し本音を聴くことで，認知症の人と家族の気持ちを知り，アセスメントに活かすことができる

《4種類のアンケートを実施》
- ○ご本人用アンケート
- ○ご家族用アンケート
- ○介護支援専門員アンケート（調査に取り組んでの思い等）
- ○事業所用アンケート（事業所として調査を通じての意見等）



ご本人用アンケート
（記入例）

■調査の位置づけ
- 根拠法令
  認知症対策等総合支援事業実施要綱，
  大崎市認知症施策総合推進事業実施要綱
- 調査名称
  認知症の人と家族の実態調査～こころの声アンケート～
- アンケート実施期間
  平成24年1月～平成24年3月（調査実施期間;平成24年1月24日～平成24年2月29日）

■調査概要
・対象者および対象者数：市内に在住の65歳以上の要支援・要介護認定者で概ね以下の要件に該当する方
　障害高齢者の日常生活自立度　自立～A　認知症高齢者の日常生活自立度　Ⅱ以上
・調査場所　　在宅および　グループホーム
・調査実施数　　認知症高齢者　113件　その家族　91件　介護支援専門員106件
・調査方法　　**聞き取り調査**

大崎市では，一番認知症の当事者，家族の身近な存在である介護支援専門員に依頼し，聞き取り調査として実施

平成24年　調査分析結果　ご本人の声

認知症であっても，本人の感情や思いはいきている
（これまでもこれからも･･･わたしはわたし）

- やりたいこと，得意なこと，自分の気持ちをもっている
- まわりの人に，認めてほしい，褒めてほしいと思っている
- また誰もがして欲しくないことは同じように嫌だ
- 役割や趣味があると嬉しい，楽しい
- 忘れることへの不安や体への不安，家族のことを心配している人もいる
- いろいろなことができなくなる理由は身体的な老化によるものの場合もある（認知症だけが原因ではない）

↓

本人の気持ちをよく聞くことが何より大事（本人本位のケア）

↓

本人の思い・アセスメントの重要性，本人を中心とする地域づくりをすすめたい

平成24年　調査分析結果　ご家族の声

本人のことについて，現在のこと，将来のこと悩みや不安がある

- 何度も同じことを言うなど，判断・理解力の低下で本人の認知症に気が付く場合もあるが，性格が変わったり，行動が変わって気が付く場合もある
- BPSDの対応に，困っている（※ただし本人はまだ自分で出来ると思っている場合もある）
- 本人を一人にできない，本人のことが心配，自分の時間がない，などで疲労しており，将来へ不安がある
- かかりつけ医への信頼，安心があるが，認知症への対応や家族の気持ちを理解してほしいと言う声もあり
- 利用する介護サービスへの感謝の気持ちが多い

↓

周囲への認知症への理解によって介護者の負担感が大きく違う，
家族の気持ちを傾聴することで本人のケアにつながる

↓

本人，家族と関わる関係者への認知症サポーター養成講座の実施
（認知症を支える地域づくりの展開），
家族支援の実施（認知症高齢者の介護家族交流会，認知症講演会）

平成24年　調査分析結果
介護支援専門員・居宅介護支援事業所の声

本人及び家族の気持ちを聞いて気がついた事がある

- 今回聞いてみて本人の思いや状態に気が付いた人も多かった
- 本人の気持ちを聞くのに，どのように伝えたらよいか悩んだと言う声もあった
- 家族の認知症を認めたくない気持ち，受け入れていった気持ちがあることが分かった
- 家族支援が大切だと気が付いた人もいる
- 医療と介護の連携，情報の共有の必要性がある
- 地域の理解の重要性や，社会支援の不足を感じている

↓

アセスメントに活かしていくことが重要，本人本位のアセスメントと，
本人に必要な地域づくりが大切と実感

↓

研修会の実施・地域資源人材育成の実施

平成24年アンケート調査から

○地域への思い（地域の理解があると本人も家族も安心）

地域啓発の拡大（認知症サポーター養成講座の実施）

認知症キャラバン・メイトとともにアンケート結果を共有
⇒活動の拡大

○介護サービスへの思い
（役割大，介護サービスの認知症ケアへの理解で支援が広がる）

横の連携の強化（人材育成事業の取り組み開始）

○医療への思い（かかりつけ医の役割大，専門医との連携）

医師会と連携し，ネットワーク化（認知症対策推進協議会の設置へ）

認知症ケアパスの作成

↓

関係者で結果を共有分析し，認知症施策に取り入れる＜活動の根拠が明確になる＞

※取組みの拡大に向け認知症地域支援推進員を増員し，連携して取り組める体制へ

平成29年　5年後の評価として調査を再実施

5年経って，地域やニーズが変わってきている気がする。再調査をして今の現状やニーズを把握し施策に生かしていきたい！
（大変だけど…でも，やろう！）
→1年かけ，推進員みんなでじっくりまとめ，考える

戻ってきたアンケート用紙のコピーをとり，項目ごとに切り離し，項目ごとに模造紙にまとめていきました

調査概要
調査目的などは前回同様＋5年後の評価として
アンケート実施期間
　平成29年1月～平成29年2月（調査実施期間;平成29年1月16日～平成29年2月28日）
・調査実施数　　認知症高齢者　157件　その家族　165件　介護支援専門員168件

平成29年分析調査結果　本人の声

○変化
・私の得意なこと→趣味や長年の仕事・役割，その他…回答できる人が増えた！
・やりたいこと，夢→趣味や役割と回答した方が2倍以上に（18%→38%）
・全体的に「なし」という回答が圧倒的に減った

ケアマネさんの聞き取り（本人の思いをくみ取る）が丁寧になった。
本人を取り巻く方たちが本人の意思や意向に沿ったかかわりができているのでは。

○前回同様
やさしくしてほしい，ほめてほしい，言葉で傷つく，バカにしないでほしい…

感情は生きている

本人ができることを見守り，自信をもって暮らしていける関りが大切

平成29年調査分析結果　ご家族の声

・物忘れがあると気づいたこと
→周辺症状で気づくご家族が多かったが中核症状の初期の段階で気づいた方が増えた！

・介護をしていてうれしかったこと
→「特になし」が36%→3%に減った
本人への，周囲の心地よい対応で，ご家族がうれしくなるという声も

・介護のどういうところを相談したか
→サービス利用についての相談が48%から39%になり，接し方についての相談が6%から22%に増えた。
＋認知症の専門病院や受診先を知りたい方が9%から14%と増えており認知症の診断には医療が必要であることが周知され始めた。

・今後充実してほしいサービスや支援
→「地域の居場所づくりや地域との交流，地域の理解」に関する回答が10%から24%へ

・新規設問「地域への思い」
→地域に理解者や協力者がいる方が約50%

「認知症になっても，住み慣れた地域で暮らし続けるために」早期発見，対応の工夫，
本人にとってのなじみの場所，人の大切さ等…意識の広まり→やはり地域づくりが大切

平成29年　調査分析結果
介護支援専門員・介護事業所の声

・「医療について思うこと」の回答数が増え，医療との連携への関心が高まっている
→認知症の正しい診断を受けることで適切なケアにつながる
初期に受診することが大切/かかりつけ医の存在が大きい　等

「医療は医療，地域は地域」の考えから「医療と地域の連携」の考えへ

・医療と介護の連携について「医療との距離を感じる」が27%から17%に
→しかしまだ医療連携にあたり，要望が多数！
・フォーマルサービスを望む声が23%から7%に
→住み慣れた家，場所に対する思いを大切にしていく必要がある
地域の集いの存在が本人にとって励みとなっている　等の回答が増えた。

地域とかかわりを持ちながら暮らしている元気なうちからかかりつけ医と連携して
情報共有していくことで，重度になっても切れ目ない支援をすることができる

・聞き取り調査で聞き取りにくかったこと「特になし」が28%から63%へ！

平成29年調査から

①認知症サポーター養成講座などを通して地道な普及啓発活動を積み重ねることで地域の理解が広まり，それによって家族の安心につながっている。
また，家族，事業所など「本人本位のケア」ができはじめている？

➡ 対応について知りたい方が多いのでサポーター養成講座の内容検討等の普及啓発が必要

②本人のなじみの環境が大事ということが理解され始めているので，引き続き地域資源を豊かにできる取り組みを住民の方と一緒に行っていく。
また，センター方式研修等の事業所研修を継続して行っていく。

➡ 重度になっても無理に家族や地域だけで関わるということではない。
症状の経過に伴い利用できる資源はお伝えしていく。

③医療介護連携をさらに進めていく必要性。

➡ 役割を生かして「つなぐ」ことの意識

令和2年2月22日
認知症の本人のチカラを活かした地域アクション
取り組み報告会

郡山市ともにあゆむ・ともに生きる
～本人の意見を活かした地域づくり～

郡山市イメージキャラクター

がくとくん

おんぷちゃん

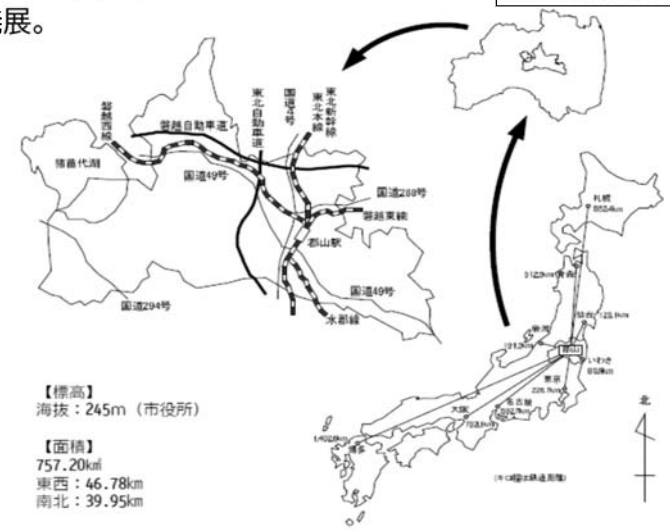
福島県郡山市
地域包括ケア推進課

郡山市について

【市の概要】

○ 首都圏から東北新幹線で約80分というアクセスの良さに加え、鉄道や東北・磐越両自動車道が縦横に交差するなど、交通の利便性が良い。
○福島県の中央に位置し、「農業・商業・工業」がバランスよく発展。

郡山の位置図



【基本情報】（平成31年3月末現在）

○人口　:322,860人

○65歳以上高齢者人口:83,348人

○高齢化率:25.82%

○要介護認定率:18,03%

○日常生活圏域:20地域

○地域包括支援センター
　地域包括支援センター17か所（委託）
　基幹型地域包括支援センター1か所（直営）　計18か所

（郡山市統計書より）

本日の報告内容について

1 郡山市認知症施策の全体像

2 郡山市の認知症地域支援推進員の活動について

3 **認知症「こころの声アンケート」**について
（認知症本人向け冊子含む）

4 **認知症ケアパス改訂ワーキング**について

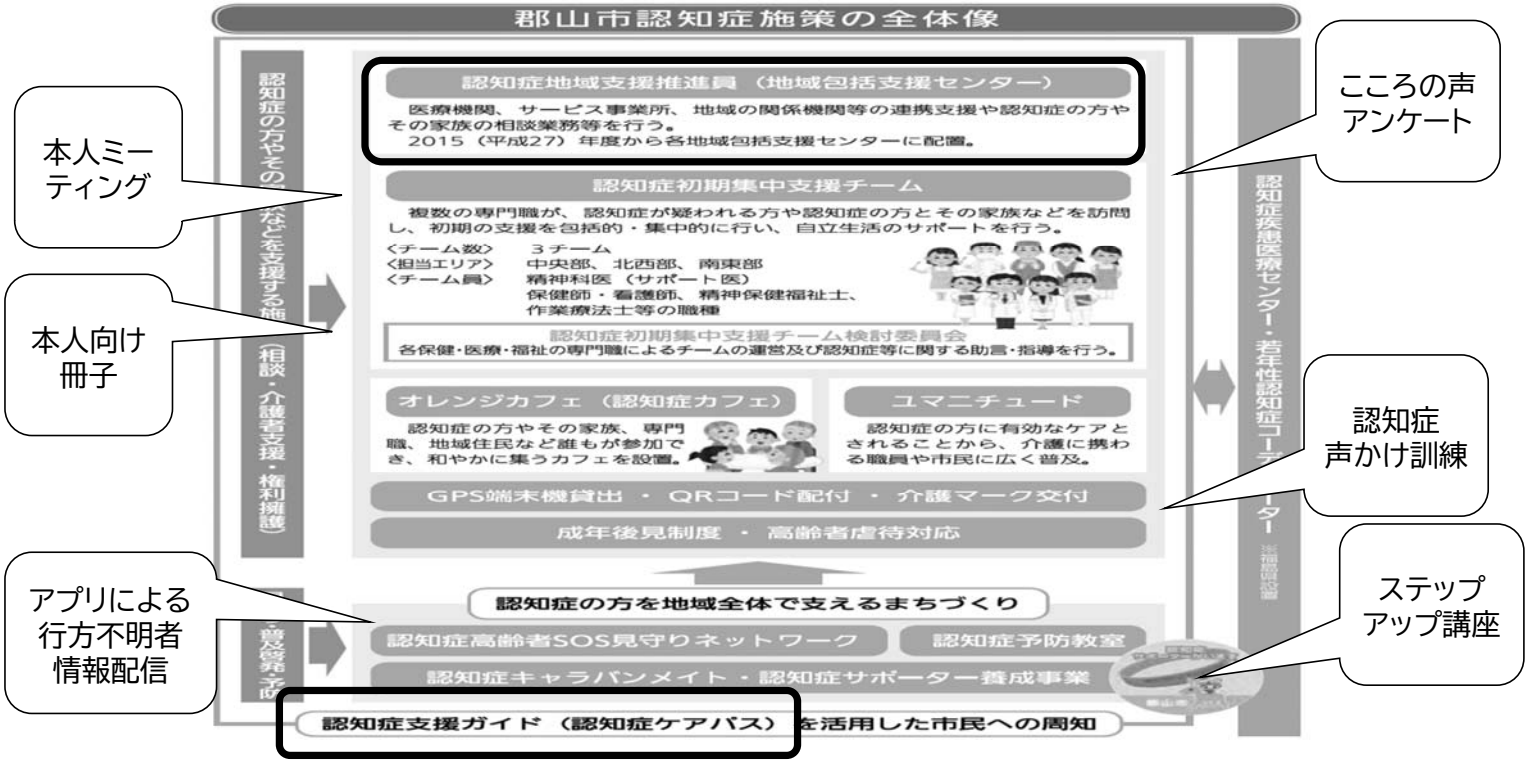
5 **認知症ケアパス改訂**について

6 まとめ

本人の意見を元に！

本人からの発信で！

1 郡山市の認知症施策の全体像（第七次郡山市高齢者福祉計画・介護保険事業計画）



2 郡山市の認知症地域支援推進員の活動について

平成27年度より地域包括支援センターに各1名ずつ計18名の認知症地域支援推進員を配置。（研修受講者は43名）

市内を３つのエリアに分かれて活動。

エリア毎に地域課題を抽出し、課題解決に向けた目標・計画を立案。（月１回打合せ）

3 認知症「こころの声アンケート」　①きっかけ

エリアで「本人ミーティング」を開催したいけど、開催するにも本人のニーズに合ったものにしたい！

中央部エリア認知症地域支援推進員

認知症ケアパスをH27年度に発行、H29年度に改訂したけど、なかなか活用されていない･･･
本人や家族のニーズを把握していないからかもしれない･･･

行政担当

本人の意見に基づいた認知症施策の推進することを目的に、認知症の本人および家族の生活状況やニーズ、地域課題を把握するため、認知症こころの声アンケートを実施した。

3 認知症「こころの声アンケート」 ②取組内容

調査期間
令和元年9月17日(火)から令和元年11月29日(金)まで

調査対象者
①郡山市在住で認知症高齢者の
日常生活自立度がⅠ以上の方
②①の家族
③①の担当介護支援専門員

調査協力者
①認知症地域支援推進員
②介護支援専門員
③小規模多機能型居宅介護職員
④グループホーム職員

有効回答数
①本人・・・・・・・・252件
②家族・・・・・・・・214件
③介護支援専門員・・・105件

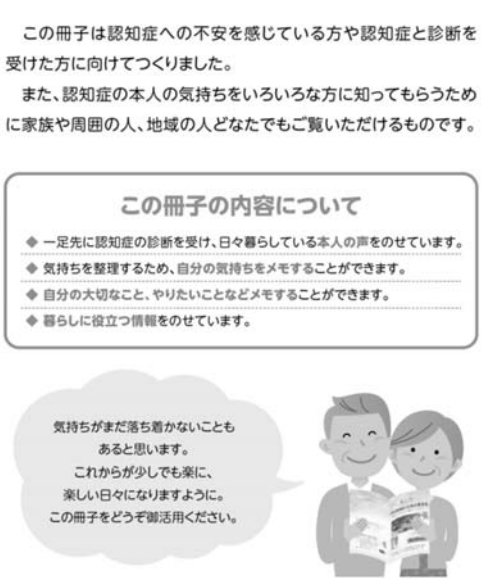
〈取り組み方法〉

① 他自治体の「こころの声アンケート」を参考とした。

② 打合せにて認知症地域支援推進員全員が「こころの声アンケート」の事業目的を共通理解し、小規模多機能 型居宅介護およびグループホームに直接持参し、説明した。

③ 本人向け冊子※(次のスライド)を配布しながら、聞き取りをした。

(参考)本人向け冊子「郡山市ともにあゆむ・ともに生きる～認知症になってもよりよく暮らしていくために～」


この冊子は認知症への不安を感じている方や認知症と診断を受けた方に向けてつくりました。
また、認知症の本人の気持ちをいろいろな方に知ってもらうために家族や周囲の人、地域の人どなたでもご覧いただけるものです。

この冊子の内容について
- 一足先に認知症の診断を受け、日々暮らしている本人の声をのせています。
- 気持ちを整理するため、自分の気持ちをメモすることができます。
- 自分の大切なこと、やりたいことなどメモすることができます。
- 暮らしに役立つ情報をのせています。

気持ちがまだ落ち着かないこともあると思います。
これからが少しでも楽に、
楽しい日々になりますように。
この冊子をどうぞ御活用ください。

認知症の診断直後や初期の方の不安な気持ちの軽減を図り、早期に必要な支援につながることを目的に本人向け冊子を発行

配布元
・高齢者あんしんセンター
・認知症疾患医療センター
・認知症初期集中支援チーム
・オレンジカフェ

3　認知症「こころの声アンケート」 ③質問項目

・最近のお気持ちは？
・日頃楽しんでいる趣味や活動は？
・得意なことは？
・苦手なことは？
・よく行くお店や場所は？
・行きたい場所は？
・最近、うれしかったことや楽しかったことは？
・不安や心配なことは？
・周りの人にしてもらったり、言われたりしてうれしいことは？
・周りの人にしてほしくないこと、言われたくない言葉、知られたくないことは？
・やりたいことや夢は？

3　認知症「こころの声アンケート」 ④本人の声

＊　施設の壁面制作などを中心になってやっています。疲れることもあるけれど充実感もあり、楽しいです。あてにされるのはやはり嬉しいです。

＊　してもらうより人にするほうが多いね。その時に「ありがとう」って言われるとうれしいよ。

＊「ありがとう」「またお願いします」と言われると嬉しくなるね。

＊　今まで通り人の為に何か仕事をし続けていきたいな。

＊　数学、物理（宇宙）のことを再度勉強したいですね。

＊　ドライブで紅葉とか季節の移り変わりを感じたい。

＊　畑や田んぼの仕事がしたい。

＊　たまにできる草取り、昼と晩のご飯作りのお手伝い。できることは何でも楽しい。

3　認知症「こころの声アンケート」
⑤本人の声・意見を活かすために必要な取り組み

本人の声からみえてきたこと	考察・今後について
外出することを楽しんだり、旅行や温泉が行きたい場所で多く回答されていた。	安心して外出できる環境づくりが必要。
よく行く場所にスーパーと答える方が多数で、スーパーの店員の対応で不快に思う方もいた。	スーパー店員対象の認知症サポーター養成講座の開催。
本人の「得意なこと」という質問には「昔は」や「以前は」とつける方が多かった。	得意だったことを今も活かせるような活動
苦手なことや周りにしてほしくないことは個別性がある。中でも人が大勢いるところ、うるさい音などが苦手という声があった。	現在認知症カフェが大勢の参加者で賑わっているところもあり、本人が参加しやすい環境づくりの検討が必要。
全体の質問を通して、「無回答」や「特になし」という回答が多い。	本人が声を出しやすくするために、声のかけ方や環境づくりなど工夫が必要
「やりたいことや夢」の回答率が低い。	本人が夢や希望を持てるような環境づくり

3　認知症「こころの声アンケート」　⑥結果を活かす

認知症地域支援推進員が集まり、アンケート結果をKJ法を参考にして、集計した。

↓

集計結果を報告書としてまとめ、調査協力の関係機関（地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、小規模多機能型居宅介護、グループホーム）にメールにて報告した。

↓

認知症情報交換会にて報告書の内容を情報共有し、今後に向けて本人の声や意見を活かすための活動について話し合う。

出席者：地域包括支援センター、認知症地域支援推進員、
認知症初期集中支援チーム認知症疾患医療センター、
認知症カフェ、認知症キャラバンメイト

3　認知症「こころの声アンケート」の実施
⑦本人の声を元に認知症ケアパス改訂に掲載する主な内容

- 相談窓口をわかりやすく
- 本人・家族ともに「**ありがとう**」と言われることがうれしいと答える方が多かったため、本人も家族も「**ありがとう**」と言い合えるように。
- 「役に立ちたい」「仕事がしたい」という声が多く寄せられ、**役割をもって、社会参加しやすい**環境が整うことを目指して。
- 本人が褒められるとうれしいという声から「**ほめる・ほめられ上手**になりましょう」を入れた。
- 家族への調査結果から認知症症状に気づいた時期が中等度以降であることが多く、また、認知症診療のための医療機関の受診に苦労されていることがわかったため、**早期に気づき、早期に受診**することの大切さ。

4　認知症ケアパス改訂ワーキンググループ　①きっかけ

認知症こころの声アンケートの結果を参考に、認知症ケアパスを改訂したいけど、作成のプロセスにも本人に入ってもらいたい！

認知症の本人がわかりやすく、身近に感じてもらう認知症ケアパスを作成するため、本人をメンバーに入れた「認知症ケアパス改訂ワーキンググループ」を開催。

4　認知症ケアパス改訂ワーキンググループ　②取組内容

ワーキンググループ日程

第1回	9/27
~~第2回~~	~~10/23~~ 台風第19号の災害対応にて中止
第3回	11/21
第4回	12/20
第5回	1/31
第6回	2/27（予定）

失敗から学んだこと

事務局が認知症ケアパスの原稿を作ることを優先してしまい、事務的な会議になったことで、本人が疲れてしまった。

本人の意見を取り入れながら、ワーキングの場づくりをし、次の回は和やかな雰囲気で本人も積極的に意見を言ってもらい、メンバー全員が終始笑顔だった。

本人が話しやすい雰囲気を作るための環境づくりが重要

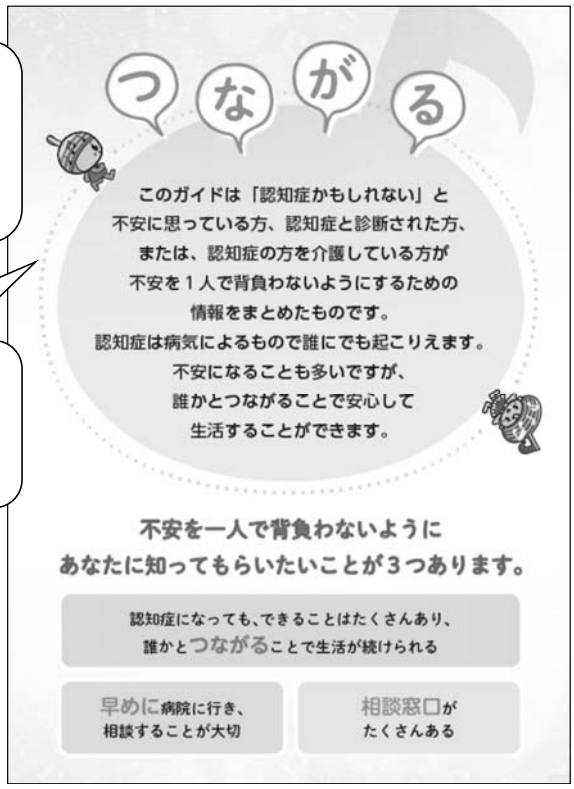
4　認知症ケアパス改訂ワーキンググループ　③本人の声

＊　今までのケアパスは見たくない。アニメみたいだったらいい。
　内容が多いと見ない。
＊　はじめは自分の症状がなんだかわからなかったけど、「認知症」と言われてほっとしたところがある。
＊　一人で抱えず、出会いがあって、**つながれた**から自分は1人じゃないとわかった。
＊　「何かおかしい」ということは自分が一番がわかっている。
＊　手を差し伸べてもらいたい人はたくさんいると思う。
＊　認知症になってもできることはたくさんある。
＊　仲間と**つながれた**から、今がある。
＊　聞いたり、相談することが大事だと思う。

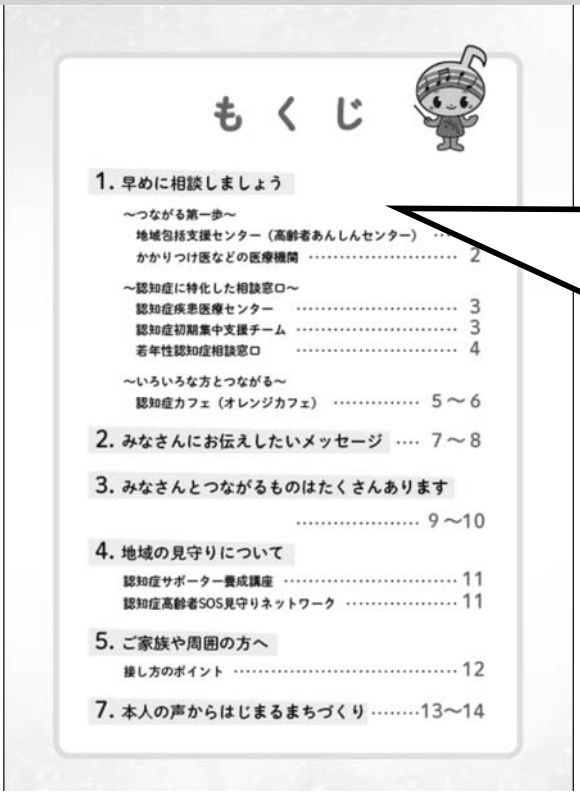
5 認知症ケアパス改訂(案)①

抵抗がある方もいるため、「認知症」という言葉は入れず、興味を持って手にとってもらうため、シンプルにした。

1ページ目には不安を一人で抱えず、誰かにつがってほしいという思いを入れた。



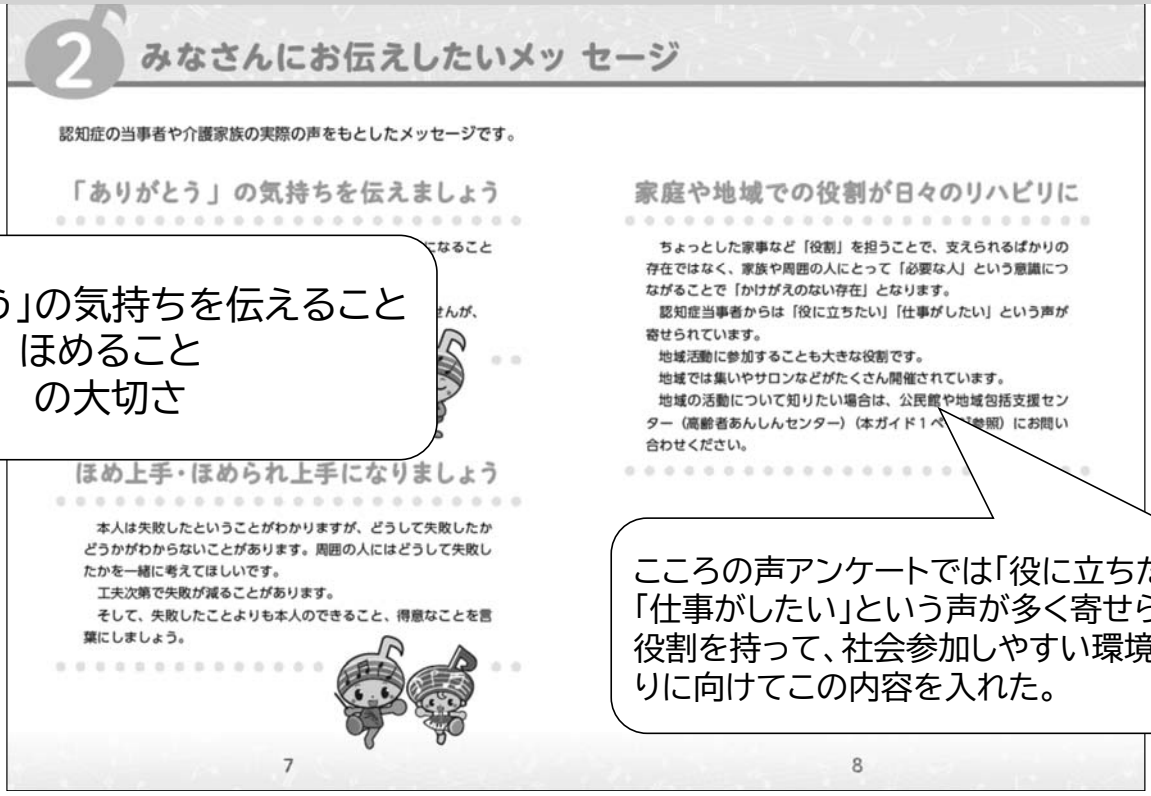
5 認知症ケアパス改訂(案) ②



誰かとつながり、そこからいろいろな情報を得てほしいため、あまり情報量を多くせず、最低限の情報のみ。

郡山市は広域のため、地域ごとの認知症ケアパスを作成することも視野に。

5 認知症ケアパス改訂（案） ③



2 みなさんにお伝えしたいメッ セージ

認知症の当事者や介護家族の実際の声をもとしたメッセージです。

「ありがとう」の気持ちを伝えましょう

ほめ上手・ほめられ上手になりましょう

本人は失敗したということがわかりますが、どうして失敗したかどうかがわからないことがあります。周囲の人にはどうして失敗したかを一緒に考えてほしいです。

工夫次第で失敗が減ることがあります。

そして、失敗したことよりも本人のできること、得意なことを言葉にしましょう。

7

家庭や地域での役割が日々のリハビリに

ちょっとした家事など「役割」を担うことで、支えられるばかりの存在ではなく、家族や周囲の人にとって「必要な人」という意識につながることで「かけがえのない存在」となります。

認知症当事者からは「役に立ちたい」「仕事がしたい」という声が寄せられています。

地域活動に参加することも大きな役割です。

地域では集いやサロンなどがたくさん開催されています。

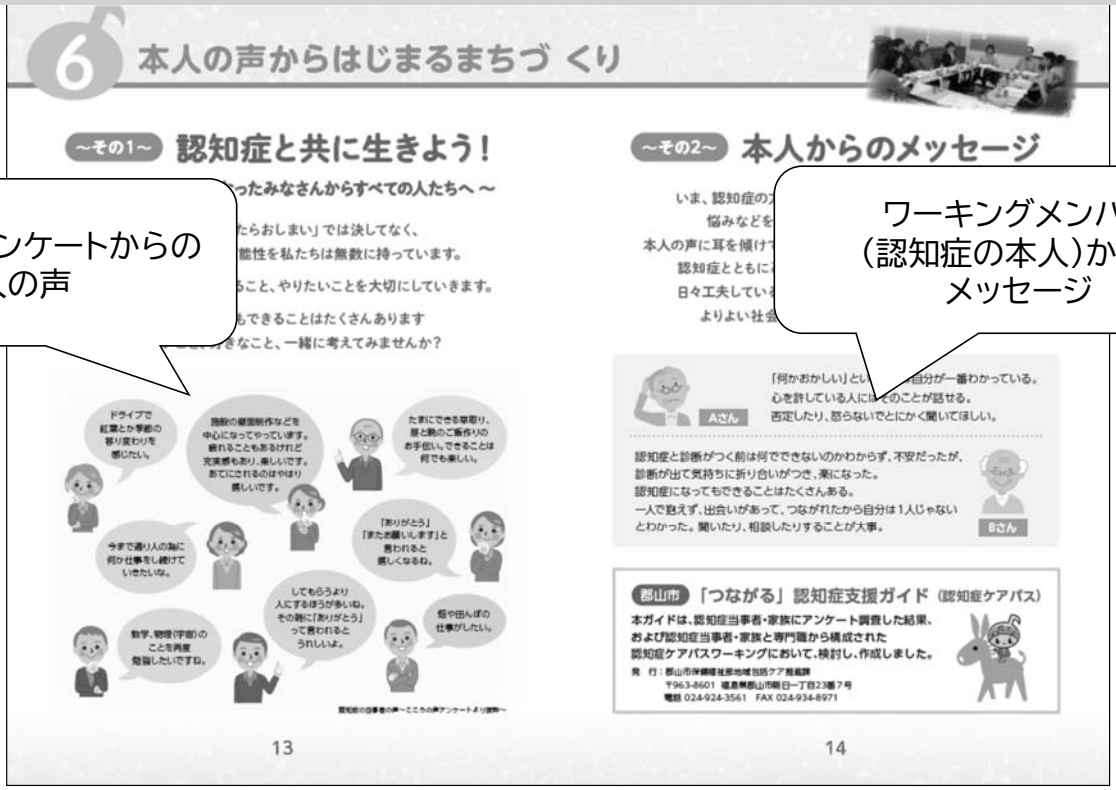
地域の活動について知りたい場合は、公民館や地域包括支援センター（高齢者あんしんセンター）（本ガイド１ページ参照）にお問い合わせください。

8

「ありがとう」の気持ちを伝えること
ほめること
の大切さ

こころの声アンケートでは「役に立ちたい」「仕事がしたい」という声が多く寄せられた。役割を持って、社会参加しやすい環境づくりに向けてこの内容を入れた。

5 認知症ケアパス改訂（案） ④



6 本人の声からはじまるまちづ くり

～その1～ 認知症と共に生きよう！

～ったみなさんからすべての人たちへ ～

たらおしまい」では決してなく、

能性を私たちは無数に持っています。

ること、やりたいことを大切にしていきます。

もできることはたくさんあります

きなこと、一緒に考えてみませんか？

ドライブで紅葉とか季節の移り変わりを感じたい。

施設の建設所作などを中心になってやっています。疲れることもあるけれど充実感もあり、楽しいです。あてにされるのはやはり嬉しいです。

たまにできる草取り、屋と納のご飯作りのお手伝い。できることは何でも楽しい。

今まで通り人の海に何か仕事をし続けていきたいね。

「ありがとう」「またお願いします」と言われると嬉しくなるね。

してもらうより人にするほうが多いね。その時に「ありがとう」って言われると うれしいよ。

畑や田んぼの仕事がしたい。

数学、物理（宇宙）のことを再度勉強したいですね。

認知症の当事者の声～こころの声アンケートより抜粋～

13

～その2～ 本人からのメッセージ

いま、認知症の

悩みなどを

本人の声に耳を傾け

認知症とともに

日々工夫してい

よりよい社会

Aさん

「何かおかしい」と

自分が一番わかっている。

心を許している人に

のことが話せる。

否定したり、怒らないでとにかく聞いてほしい。

認知症と診断がつく前は何でできないのかわからず、不安だったが、診断が出て気持ちに折り合いがつき、楽になった。

認知症になってもできることはたくさんある。

一人で抱えず、出会いがあって、つながれたから自分は1人じゃないとわかった。聞いたり、相談したりすることが大事。

Bさん

都山市 「つながる」認知症支援ガイド（認知症ケアパス）

本ガイドは、認知症当事者・家族にアンケート調査した結果、および認知症当事者・家族と専門職から構成された認知症ケアパスワーキングにおいて、検討し、作成しました。

発 行：都山市保健福祉部地域包括ケア推進課

〒963-8601 福島県都山市明日一丁目23番7号

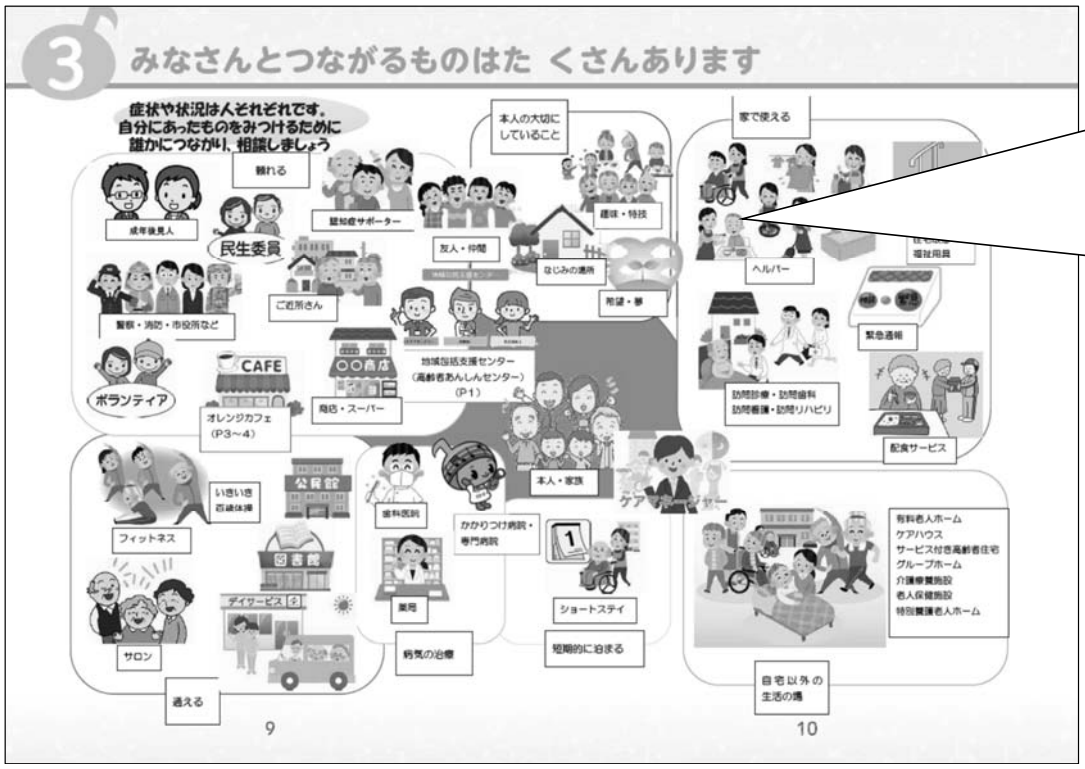
電話 024-924-3561 FAX 024-934-8971

14

こころの声アンケートからの
本人の声

ワーキングメンバー
（認知症の本人）からの
メッセージ

5 認知症ケアパス改訂（案） ⑤



ケアパスの中に「本人の大切にしていること」という項目を追加。
本人がつながり、支えとなる
「**友人・仲間**」、
「**なじみの場所**」、
「**趣味・特技**」
「**希望・夢**」を入れた。

6 まとめ

♫ 本人が見やすいものはみんな見やすい！
→認知症ケアパスは発行はまだですが、案の段階で他の関係者からも「見やすいね」と言ってもらっている

♫ 本人の発信力の大きさを実感！

♫ 困ったときは、本人に聞くのが一番！

♫ 本人に聞く一歩を踏み出すだけで大きな効果

令和元年度老人保健健康増進事業
認知症の本人の意見と能力を活かした生活継続のための認知症施策の総合的な展開に関する調査研究事業
令和2年2月22日

認知症本人の声を活かして

鳥取県鳥取市長寿社会課

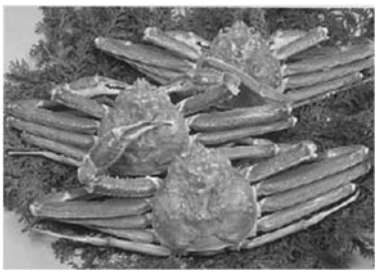
Ⅰ 鳥取市の概要

鳥取市の概要

・平成30年4月に中核市へ
・面積　765.31 ㎢

２０２０年版住みたい田舎ベストランキング

子育て世代が住みたい田舎部門　第１位
若者世代が住みたい田舎部門　第２位
宝島社　田舎暮らしの本２月号



基本情報

●総人口　187,112人
内６５歳以上人口　54,003人
高齢化率　28.9%
要介護認定者数　10,442人
若年認知症（４０～64歳）92人
●日常生活圏域数　１８圏域
●地域包括支援センター数　５か所
●認知症地域支援推進員数　１名

（令和元年9月末現在）

認知症になっても安心して暮らせるまちをめざして

①認知症への理解を深め、地域で見守り・支え合う体制づくり

◎認知症サポーター養成講座
◎認知症を学ぶ会、フォーラム
◎認知症高齢者等安心見守り登録事業の普及
◎ご近所見守り応援団協力店の普及等

②早期診断・早期対応に向けた体制の充実

◎認知症初期集中支援チームの活動
◎認知症ケアパスの普及

③居場所づくりや介護者支援の充実

◎認知症地域支援推進員の配置
◎認知症カフェの支援
◎認知症高齢者等やすらぎ支援員派遣事業

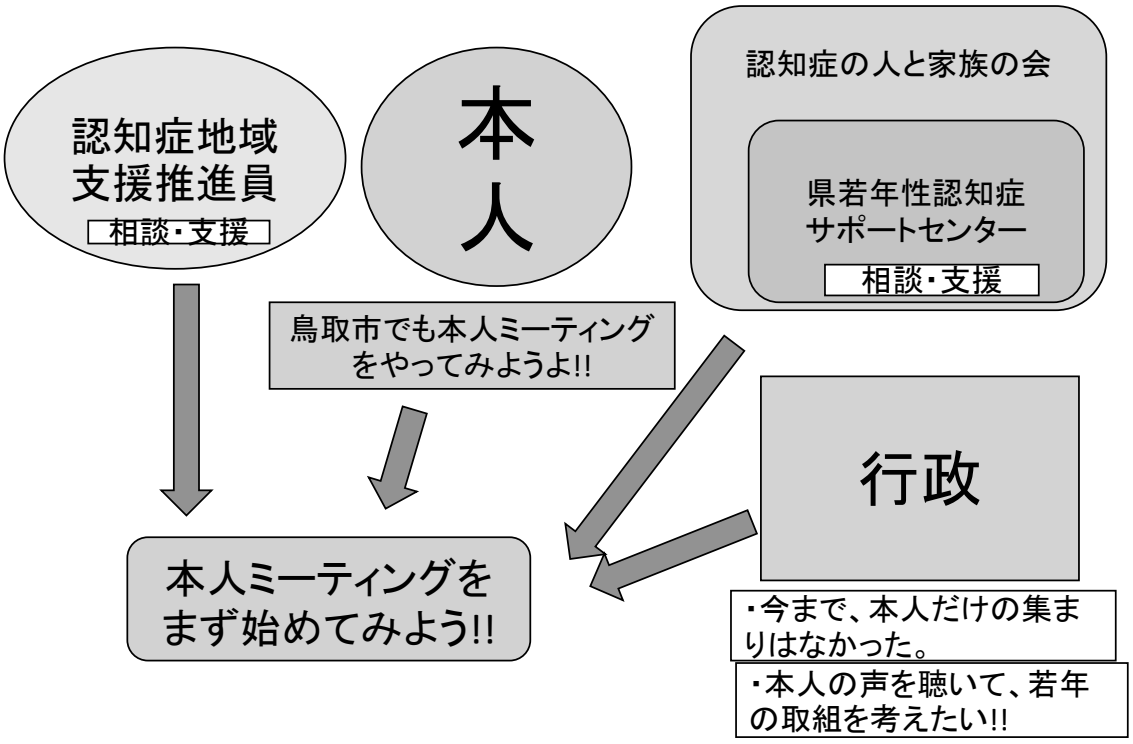
④若年性認知症の支援

本人の想いや課題の把握をし、今後の支援のあり方を検討

第7期鳥取市介保険事業計画・高齢者福祉計画

Ⅱ 本人ミーティング

開催までの経緯(H30年4月)



本人主体って言うけれど

- 本人ミーティングのねらいをきちんと共有しないといけないね。
- 本人が主体だけれど、まわりの支援者がそれぞれできるところを分担しないとね。
- テーマは?　進行は?　開催場所は?
- 参加のとりまとめや連絡方法は?連絡範囲は?

支援者だけで話していても始まらないね。

運営委員会を開いて、本人と一緒に決めて行こう。

(本人ミーティングの開催前、振り返りの会)

本人ミーティング

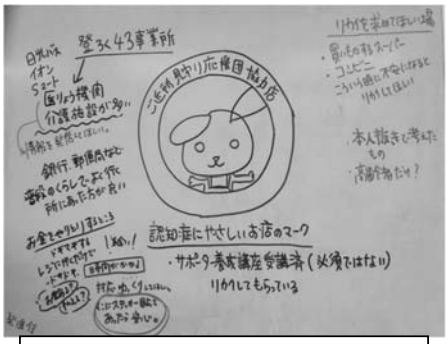
① 開催頻度　2か月に1回　偶数月に1～2時間程度
② 開催場所　鳥取市内
③ 参加者　本人8名から10名
（鳥取市は約半数、倉吉市、米子市等）
支援者12名から13名
④運営委員会 事前打合せや振り返りを行い、
テーマや開催場所、役割分担等を決める。
（メンバーは本人、認知症地域支援推進員、
認知症疾患医療センターMSW
若年性サポートセンター、県、市）
⑤予算　今年度は県が予算化

本人も支援者も参加者
みんなで作ったチラシ

※本人ミーティングとセットで希望者は食事会も

本人の声を聴くこと、知るために工夫したこと

①本人と一緒に事前の打ち合わせや振り返り
②本人ミーティング当日だけでなく、普段から何かを一緒にしているパートナーがいる。本人とパートナーの関係が良いと安心して参加できる。
③言葉に詰まることがあっても本人の話をゆっくり最後まで聴く。
④ミーティング会場を固定せず、様々な飲食店等で開催。認知症について理解があり、安心して話ができる場所づくりと場所探し。



話の内容を板書

Ⅲ本人の声や意見から

本人の想い

- こういう風な集まりがあって、同じような人達と居られるだけで安心。
- こういう人達だったら話せる。支えになって心強い。
- 自分の病気を伝えることが、娘にとって不利益になるのではないか。
- こういう場所だけだと思うとダメで、地域づくりをしていかないといけない。
- 友達がいない。
- 誰でもはじめて参加する時は緊張している。慣れてくるまでに時間がいる。

本人の変化や気づき①

・最初は集められて話すような雰囲気だったが、 本人ミーティングを始めて1年経過したころから、本人たち自らが考え、楽しく、話したい、やりたいと思える会になってきた。

本人の変化や気づき②

- 本人ミーティングでの仲間との出会いで本人が前向きになった。

→本人に挑戦したいことが出来た。

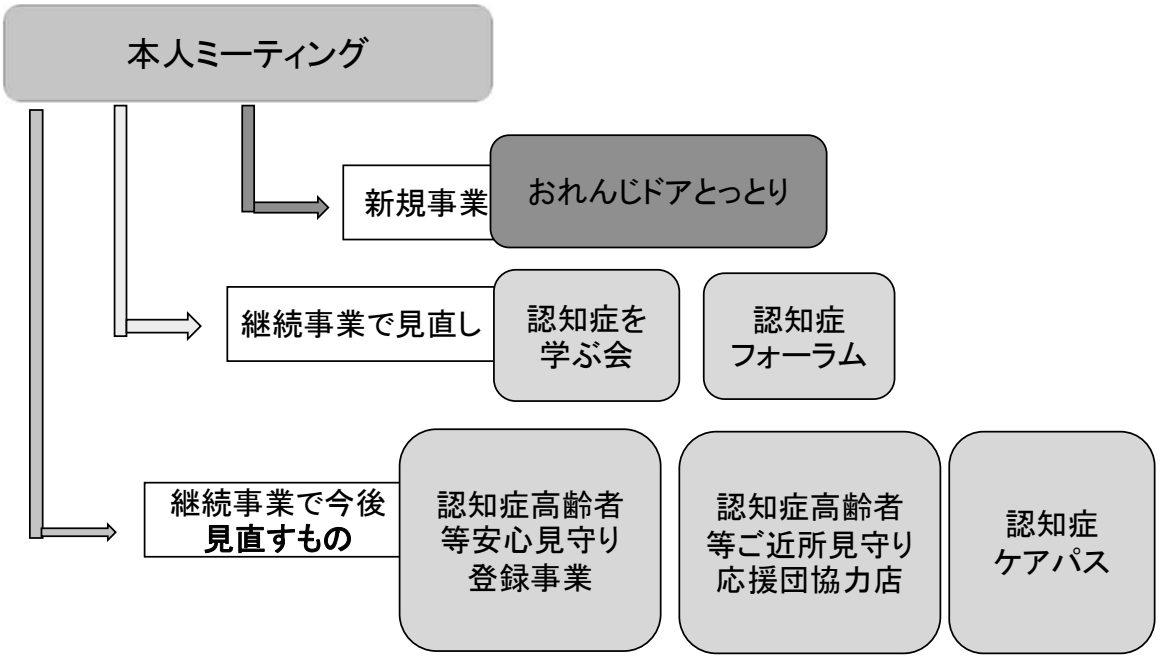
→パートナーが気づき一緒にやろうと応援した。

⇒「認知症のことを伝えていくことが、元看護師だった私の役目だと思う(Mさん)」

行政の気づき

- 今までの施策は本人の声を踏まえず企画していた。
- 誰のための、何のための事業なのかを考えなおし、認知症本人の意見を丁寧に聴いて、検証していくことが必要。
- 本人ミーティングで出た意見をその場限りにせず、たくさんの市民の人や専門職に知ってほしい。
- 本人と活動していくことで、今まで気づかなかった新たな展開がある。

本人の声を聴いて



具体的には

本人ミーティング

おれんじドアとっとり

たくさんの人に
知ってほしい

市報、医師会報に掲載

医療機関まわり

病院PSW連絡会、
ケアマネ連絡会で周知

コミュニティーラジオ
へ本人出演
(おれんじドアとっとり)

具体的には

本人ミーティング
(外出をテーマに)

こころの
バリアーフリー

鳥取環境大学の学生さんと
大学で本人ミーティング
(外出をテーマに)

こんなマーク見
たことない!!

認知症高齢者等ご近所
見守り協力店

認知症を学ぶ会
(外出をテーマに)

①認知症があっても自由に行きたいと
ころへ行きたい。
②認知症本人が失敗しても、失敗さ
せないようにしようとするのではなく、
どうしたらよいかを本人と一緒に考え
てほしい。

まとめ

●取り組んでみて気づいたこと

①本人の力なくして認知症の取組はできない。
事業の中身に本人の想いが入っていなかった。

②失敗させないのではなく、失敗からどうすれば良いか本人と一緒に工夫を考えていくことが大切。

③それぞれの立場で意見をぶつけ合いながら、お互いの立場を理解しつつ、時間をかけて作りあげていく。

●次に取り組む人に伝えたい事

①まず、本人とともにアクションを起こす。

②本人の声を丁寧に聴き、共有していく。
(身近な本人の声をキャッチすることが大事)

③事業の運営がより良くなるよう本人と一緒に考え続ける。

ご清聴ありがとうございました

本人を起点にした事業
～福岡県大牟田市～

令和元年度厚生労働省老健事業

２０２００２２２

江川　陽子/竹下　一樹

福岡県大牟田市の概況

●大牟田市の人口
　約210,000人　⇒　114,496人
　（1960年）　（2019年4月）

●高齢者数　49,503人
　高齢化率　36.3%
●世帯数　56,711戸
　高齢者のいる世帯　30,590戸　（54.1%）
　高齢者単身世帯数　14,646戸　（25.8%）

●面　積　81.45㎡
●公立小学校区数　19小学校区
●公立中学校区数　8中学校区
●地縁組織加入率　47.8%

＊　2019年現在

大蛇山祭り

宮原坑(世界文化遺産)

認知症介護に関わる実態調査（平成14年度）

○このような取り組みを進めてきたのは、平成14年度に市内全世帯と高齢者・家族・職員を対象とした大規模な認知症介護に関わる意識実態調査を行ったことがベースになっています。
○調査そのものが市民への啓発であると確信していましたが、市民から寄せられた2,200ほどの認知症に対する不安や苦悩、地域全体で支えるための意見や提案が届いたのには驚きました。
○すべての声を考察してみると「認知症対策や地域づくりへの提言」が浮き彫りになり、その後の大牟田市における認知症対策はその提言に一つひとつ対応してきたものです。
○このうち「行政と地域の連携、推進者の育成、介護現場の質の向上、いつでも相談できるサポートセンターの設置」についてはその重要性を感じながらも、しばらくはそのことを共有できる関係機関との関係づくりに時間をかけていきました。

Q. 地域で認知症の人を支える意識やしくみが必要ですか？

思う	思わない
2661人	512人

地域づくりの提言、キーワード → 活動の基盤

- ☆ 向こう三軒両隣、隣組、小学校区単位の身近なネットワークの構築
- ☆ 公民館、民生委員の機能の復活と地域資源の活用
- ☆ 認知症を隠さず、恥じず、見守り、支える地域全体の意識向上
- ☆ 行政と地域の連携、推進者の育成・配置、介護現場の質の向上、いつでも相談できるサポートセンターの設置
- ☆ 子供のときから学ぶ、触れる機会をつくる
- ☆ 家族への支援、家族介護の負担の軽減

～多職種協働・多世代交流・地域協働を生み出そう～

認知症コーディネーター養成研修

人づくり

認知症の人の尊厳を支え、本人本位の認知症支援の牽引役、まちづくりの推進者の育成

２年間の研修を終えたコーディネーター修了生は、所属事業所内で認知症ケアを実践する他、地域に認知症の理解を浸透させるために様々な取り組みを実践

もの忘れ予防・相談検診 ～介護予防教室「ほのぼの会」

早期支援

認知症の早期発見・早期対応を目的として、もの忘れ予防・相談検診を実施

フォローが必要な人は、地域交流施設で開催する認知症予防教室へ

認知症サポートチーム（全国モデル）による継続支援

大牟田市地域認知症ケアコミュニティ推進事業

小中学校の絵本教室

認知症サポーター養成講座

理解啓発

子どもの時から、認知症の人の気持ちや支援について学ぶため、小中学校での認知症の絵本の読み聞かせとグループワーク

地域や職域団体等を対象に認知症の正しい知識やつきあい方を学ぶサポーター養成講座（約15,000人）

高齢者等SOSネットワーク ～模擬訓練～

地域づくり

SOSネットワークの実効性を高めるための模擬訓練（13年目）

認知症になっても安心して暮らせるまちをつくるために、市民へ認知症の理解と見守りの重要性を啓発し、日常的な声かけ・見守りの意識を高めるとともに、行方不明発生時に対応するSOSネットワークを構築

模擬訓練実施結果

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
訓練参加者合計（人）	3,083	3,127	2,945	2,603	2,617
外出役数（人）	107	95	82	102	87
外出役への声かけ（人）	1,506	1,627	1,087	1,676	1,551
模擬訓練参加校区数	21	21	19	20	19
サポーター養成講座開催数	38	43	38	24	36
受講者数（人）	1,102	1,322	896	873	1,080
他都市からの視察（人）	177	173	141	94	93

※小学校再編により、30年度から市内19校区になりました

これまでの視察者 約4,000人（うち、模擬訓練1,149人）

これまでの取り組みの振り返りについて

認知症SOSネットワーク模擬訓練などを軸に「認知症にやさしい街づくり」を展開してきたと考えていた。

共に活動を推進してきた地域のメンバーが認知症の診断を受け、家にひきこもってしまった。
多くの人たちが自宅に来て声をかけてくる、地域のサロンに顔を出すと自分の行動を先読みし声をかけてくるのが理由だった。

模擬訓練は「認知症の人達を支えましょう」という啓発訓練である。自分が認知症になった時には、「支えられる対象になりたくない」ということであった。

認知症の人を**「支えられる対象」**として捉えていた。

出典：NPO法人しらかわの会　理事長　前原　剛

認知症　当事者ミーテイング

場所はファミリーレストラン

平均年齢は60歳後半

当事者にしか話せないことがある。

認知症　当事者ミーテイングの風景

当事者と共に作る次なる風景

診断直後の

ご本人・ご家族の言葉

・当事者と会いたい。
・情報が欲しいがネットは使えず、本屋には本が少ない
・図書館では見つけることが出来なかった

当事者とつくるやさしい街プロジェクト

認知症にやさしいまちへ

図書館へコーナー設置

関係分野や市民の意見反映

大牟田

「認知症になってもやさしいまち」に向けた大牟田市のプロジェクト会議が先日、カルタックスおおむたで開かれた。認知症の当事者や家族らが使いやすい図書館づくりから始まった取り組み。行政や市立図書館などの職員、医療・福祉関係者らが参加。開催後の5月末には、市立図書館に認知症コーナーが設けられ、早くも環境が変わりつつあるという。3回目となった会議では、スーパーなど関係分野を巻き込む意見を交わした。

認知症にやさしいまちへ意見を出し合ったメンバーら

早くも環境変わりつつある

同市は認知症になっても安心して暮らせるまちを目指し、地域住民、行政、医療・福祉分野が中心となり、まちづくりを進めている。認知症初期診断直後に「今後、自分はどのようになっていくのか」「そもそもどのような症状なのか」との相談があったことをきっかけに会議がスタート。

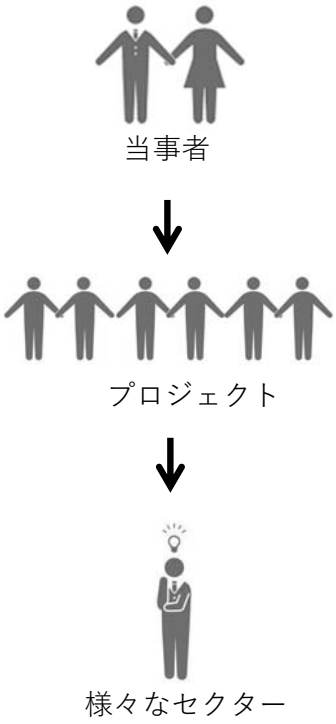
若い世代やはパソコンやスマートフォンを利用できれば、すぐに調べることができるが、高齢者の多くは書物から情報を収集。図書館で本を探しても認知症に関する本は、医学や福祉・介護のコーナーなど点在していた。そのため利用しやすい環境を目指し、5月末には認知症関連の本を並べたコーナーが図書館に設置された。

今回は「できることと、取り組みたいこと」なら、グループごとに意見をまとめて発表した。

参加者は、図書館から金融機関や交通機関などにも目を向けて意見「スーパーの陳列を見やすくし」と高齢者や認知症にやさしいとの視点でのエ夫を提案。「当事者の話を聞いて学ぶ」「ロゴマークを設置し普及を」「一緒にまちを歩いて何が不便かを見たい」「学校の図書館にも認知症のコーナーを」「認知症カルタを作っては」などと話し合った。

今後、会議を重ねるとともに意見を集約し、可能なことは実現を目指す。認知症サポート医でプロジェクトリーダーの藤井直樹さんは「認知症にやさしいまちづくりに貢献したい」と話していた。（高田 裕子）

図書館内に設けられた認知症のコーナー



認知症にやさしい図書館＆博物館プロジェクト

認知症にやさしい図書館＆博物館プロジェクト

ご本人・ご家族

・色んな情報が欲しい
・ネットは使いにくく、本屋さんには本が少ない
・図書館では見つけることが出来なかった

認知症専門医

・正しい情報を提供したい
・ポジティブに暮らして欲しい

市役所

・認知症の人が暮らしやすい地域

みんながつながる
チーム　おおむた

図書室

・住民の暮らしに沿った機関へ
（出張図書館・回想法）
・様々な機関との連携協力

市　民

・生活に身近な図書館＆博物館
・色んな場所で多くの人との出会い

学校・学生

・社会学習
・人に優しい教育

認知症にやさしい動物園プロジェクト

認知症の人の就労や社会参画の取り組み

有明新報　2018.4.19

新たな社会支援の創出に

要介護高齢者 生き生きと

事業所が軽作業提供

市担当課呼び掛けで

デイ利用者ら1時間程度

大牟田

ヤマト運輸　と　介護サービス事業所

認知症の本人のチカラを活かした地域アクション取り組み報告会

本資料は、日本認知症本人ワーキンググループのホームページに掲載します。

http://www.jdwg.org/

令和2年2月22日 発行・配布

一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ
contact@jdwg.org